頭かんでんあるまゝ此三人が祈て居る樣子をばちらつと繁昌記体ふいもふなら

芳紀宛も二八七分の春色櫻花の將ま蕾を破らんとするが如く他日の爛熟想見るに堪さり縮緬の衣裳當世の薄色を用ひ少く意氣ま過ぎたりと雖肩揚の向どけなきハ以て其失を償ふま足る文禪の帶在来の柄を襲ひ古風乃嫌なゝと雖やの字ま結びゝるを以て却て奥床しきの觀あり雲鬢ハ是流行形の高髷花簪只淡藍色蕾微の洋簪を酔羽を



殆ゝ淡泊無味ま似さりと雖其中自ら無量の情致あり鈴形の目元愛嬌溢るゝが如く新月の雙眉露滴らんとす嗚呼是誰家の箱入娘ぞ神前ま稽首して默禱をゝく妾が母ハ元来觀劇を好ミ妾幼ゝして母の懷ふ在し時ゝ常に母ふ抱りて見物せざるハなし是ふ於てゝ習性と爲り道頓堀五坐の劇場ハ二の替り盆替りゝふも更なり手打顔見世夜芝居ふ至るまで常に母ふ抱りて見物せざるハなし是ふ於てゝ習性と爲り妾も亦甚だ劇を好む稍長ずるに及で好劇の病腦裏ま浸染し凡そ興行毎の芝居曾て一たびも見外したる事あく又其俳優を好を之を貴ぶこと恰も耶蘇教徒のエスキリストま於けるが如し座頭の名優より大部屋の馬乃足ふ至るまで生旦淨渾丑等の伎倆の巧拙面貌ゝ醜美一を一て熟察判知せざるハなし特ま當時若手の立役評判の人氣役者ゝ如きに至てハ其細君の有無情婦の如何より樂屋の模樣内幕の魂膽まで穿鑿探究至らざるなゝ新聞屋の探訪者と雖恐くハ妾に三舍を避ざる能得さるべし然るふ阿母近來漸く老ゝ好劇の念次第ま薄らぐに隨ひ頻ま妾ゝ芝居行を禁

じ年頃の娘の芝居や俳優を好くハ身を過つ媒介なりと稱し家ゑ在て下女のお竹と俳優の噂をもるさへ小言を云ふゑ至り昨今ハ容易く道頓堀ゑ足を向る分得ぞ嗚呼是れ何の不幸ぞや妾性来亦好劇の癖ありしやも知るべからずと雖斯の如く三度の食事よりも深く之を好むゑ至らしめくるもたい誰の罪ぞや顧ふゑ阿母ら教導ゑよりて幼少より觀劇の慣習て養成し之をして益助長せしめたるに依ぞんバ非ぎ然ゑ而して今や遽に其性と習とを執て一時ゑ之を抑壓し去らんとハ無理難題ゑ亦甚しと以ふべし況や始めハ之を導き後ゑハ之を抑へんとするをや前後撞着の甚きもたと謂ちぞして何ぞや仰ぎ願くハ稲荷大明神變通不測の靈瑞を現し阿母の心を改めしめ阿母をして旧の如くサア今日も浪花座へ往て来ハ明日も辨天座を見物せよと乞恩命を下さしめ玉へ且亦ゑ聞けバ中村雁次郎ハ東京に登り各座の劇場ゑ出勤して評判甚高く八百八街の藝者小娘細君寡婦ゑ至るまで一度雁次郎を見て忽ち身震を為し将ゑ戀

死せんとする者多しと妾之を聞く毎ゑ心配胸ゑ溢を短夜も尚碌々眠ると能ハず彼優ゑして決して男地獄る所なりとハ雖萬一の浮氣又期もべからぎ若し彼地ゑ於て好なお方ガ出来帰る紙忘るしガ如き事ハらバ夫こそ妾ハ何とせん是を思ひ彼を念ひ轉爵憂焦心ゑ堪を兾くハ明神の威徳ゑより一日も早く彼優の無事ゑ帰阪せん事を併せて懇祈哀禱を鈴の音ガラ〳〵〳〵其後ゑ佇立して何事をり祈る者ハ處女ガ伴ふ所の下婢なり唐縮緬の余所行帯文庫ゑ結び一方ハ稍長く垂れて一方ハ短く成づて幅廣く丈長く裝ふと雖回大の臀を隠をゑ由なし七月の仕着ゑ頂戴したち河内縞の曠着ゆき短くして肘を露し裾高く褰げて踵を被むぐ足の垢切れ裂破れて正月の鏡餅の如く米粒の其間ゑ箒を在るりを疑むしむ毛髪赤く縮をて僅ゑ旧弊の下婢髷を束ね得さり下婢自ら謂ふ妾ガ頭髪ハ束髪ゑ適をと果して然るや否ハ之を保証ぞる能限ゑ非ぐ年紀を問へバ真更二九ら

ぎと雖外見の想像二十二三と踏むもの多し兩頰高く張て前額の突出と相應じ恰も是三方對峙せる山岳の如し思むさりき中間低き處ゐ獅々鼻の有んとい宜なる哉之を溪間玷櫻ゐ譬ふることと膚の色ハ印度人の如く漆黒ならんと雖又歐洲人の白きに似ず假令バ黒白青黄赤の五色を合せ更ゐ他の一種異樣の色素とハ何ぞ試ゐ之を獨乙國伯林の染物工場ゐ依頼し技師をして分析研究せしめんか如何なる學理を應用もと雖恐くハ其素質を發見する事能はざるべし而して著者ハ容易く之を知まり何ぞや曰く鬼も十八番茶の出花色ハ思案の外と以むぎや色の分析豈學理ゐ解も必處ならんや須く實地の經驗を要もべし實地經驗ゐ世ゐ重ぜらるる故なきゐ非さるなり徐ゐ神殿ゐ向ひ胡蘿蔔の如き兩手を合せ口裏喃々祈願もらく妾ハ元安藝國廣島在の産ゐして二年前今の主家ゐ傭むる將ゐ家を出んとする時父母妾を戒めて曰く凡畿内西國ゐ於る農工商各家ゐ處女ゐして一たびハ大阪の地を踏んで二年三年の奉公を為し裁縫調理ゐり行儀作法言葉遣ひゐら尻の拭き樣まで之を仕習ひ見覺えて後故郷ゐ歸るに非ざれバ婚嫁を求るゐ玷なく一任之在と以ふと雖相應の所へ嫁もる事を得ぎ故ゐ女子を有てるゐ玷必ず可愛い子ゐ旅をさせ遥々大阪ゐ登らしめて修業をさもる事從来一般の慣習なり今汝をして彼地に赴かゝ〜むるゐ亦偏ゐ都會の美風良俗を見習むしめて以て汝が身の品格を高めしめ汝が將来の立身を慮るに在る玷ゑ汝深く父母の慈愛を思ひ身を慎み以て主家ゐ奉仕せら尚且ゐ婬奔猥褻の事を為して汝が生涯を過ち又父母をして長く憂慮せしむると勿れと妾亦堅く盟て郷里を出づ然るに主家ゐ任へて後未だ三日ならざるに店の番頭善六なる者妾が這出の世間知らずなるを奇貨とし初物の十六きゝげゐ七十五日延命んとの考を起し禿頭の茶瓶ゐも恥ず或夜窃ゐ妾が卧床を襲ふ妾初めハ父母の箴言を守り固く執て彼が所望ゐ應ぜず茶瓶頭を張り倒し菊石面を掻きむ〜ると雖彼恬として懲たる色なく尚根強く通ひ来る事恰も

深草の少将の如く連夜妾をして安眠をる能はざらしむ心弱きハ婦女子の常情遂ふハ根負けして彼が意ゑ隨ひ一たび下紐を緩めてより彼禿頭菊石面の厭ふべきも真更捨難きの思ひ切り尓後汁の盛様杓子め加減を以て窃ゑ慇懃を通ずれバ彼亦下〳〵る眼尻を以て之ゑ應じ情交轉た浅からざりき然るに何時ぞや令嬢の芝居行きにお供し美しき俳優を一見ちてより妾が心忽ち動き曩ゑ可愛〳〵とし番頭も今ハ面を見るさへ嫌でくならば其影を見るも尚胸悪く為ふ嘔吐せんとをるゝと其幾回なるを知らず成るハ厭なり思ふハ成らバとハ俚諺の戒めまして世事の意の如くならざるハ此道のことに而らバ妾亦敢て之を知らざるに非ず然れども折角大阪三界へ踏み出したる甲斐ゑハ仮令立者の白首ハお齒ふ合もずとも責てハ大部屋相中の雅樂多役者なりとも流石ハ藝人社會の垢抜けしたる意氣な殿御と一宵たりとも添臥をる事を得バ妾が百年の命を縮るとも敢て意とする所ゑならず伏て願くバ大明神ゑ加護ゑより妾が願を叶むせ玉へ又彼禿頭をして妾が事を斷念らしめ玉へ又願くハ主婦をして令嬢ゑ芝居見物を許さしめ玉まで庇蔭ゑ依て時々道頓堀ゑお供をる我得好嗜な蒟蒻南瓜の煮ころがしを行厨ゑ詰て美男の顔を見る我栄を得ん南無正一位土佐稲荷大明神妾が心願を叶むせ玉まで金の燈篭千燈篭銀の燈篭萬燈篭を献納しゝて大願成就の神恩ゑ酬ひ奉るべし歸命頂来

傍ゑ蹲踞して神を凝し祈念をる者ハ年紀二十を越ること二三ならんり是只外貌をゝて之を想像をるのミ其實四五或ハ六七なるやも亦未だ知るべからざる我怪物なり翠髪軽く島田に結び前髪高く額の前面ゑ突出し後髪ハ長く領の後部ゑ曳き側面より之を見れバ恰も将校の正帽を戴きたるが如し實欽細くして僅ゑ赤小豆大の珊瑚を貫き銀櫛薄くして将ゑ風ゑ飛び去らんとする阿娜たる風姿寒梅春瘦せてゝるゑ似玉骨殆ど支ざるゝを疑ふ暗香清婉人を襲ふと雖何所やら氣の許せぬ凄味あり問ぞし

て狹斜場裏の老猫なるを知る心中窃に念ぜらく妾は元是南陽の妓既に十年前に於てクゲ社位に昇り尓来五花街北廓新町等に轉席し曾て馬関長崎に出稼し又去て四國南海を經廻し再び此大阪に歸り来り今は即ち此堀江に在り「深き思ひは堀江の淵と槁ぐ無けぬば渡られぬ」とふ宜なる哉妾は元来の浮氣者定る夫を持つを厭ひ藝人社會に浮身を窶し白首シカ社嫌ひなく妾が金函として常に大事に秘る鼻下の長者鼻毛の伸士より取揚げたる金錢は直ちに彼等に吸ひ取られ色と欲とに為に身を修め難く常に借錢の淵に沈淪し深く思ひを焦せと雖今となりては誰濟くる者もなく世をのんきに渡るべき橋さへ絶て困頓窮乏譬ふるに物なし冀くば明神の御恵を以て少く妾が今日の窮迫を救ひ給へ妾今は年將に三十に近のらんとは「面影社のむらで年の積れらし」と思ふと雖も今年花落顔色改明年花開復誰在只行く落花に逢て長く嘆息をるのみ昔は曳手數多の全盛なりしも今は三弦箱蜘蛛の巣屈と為り妾を顧るもなく日に月に減じ門前空く雀羅を設くるに至れり或は以ふ藝者は藝を以て渡世をなん何ぞ年の更るを憂ん況や藝は若りざるに於てをやと是事を解せざる野暮の書生論のし今や一般に用ひらるゝ藝者は藝を非ずお世辞に非ず只年の若きと顔の美きと情の多きとを喜ぶのみ藝の如きは措て問むざるも社比々皆是なり年の老少に大関係なる正に斯の如し妾曾て之を思むざるに非ず只勢の盛んなるに任せて末は野となれ借錢社山となるとも妾が腕前を以てして何の案じる事あらんやと世は何時も春の如くに思ひ浮れて暮したるに坐せるのと嗚呼悲しい哉昔に變る今社苦艱呼出日に遠ゝて線香の煙靉靆くと稀に花代月に減じて花山帳余白多し本業の收入其額を減ずる事知るべきなり況や線香の外の利益に於てをや況や米櫃となるべき且那の無きに於てをや又況や俳優買ひ社放蕩を為ぶべき資本に於てをや曠着の衣裳色褪て新調を促し質屋の丁雅流れを報じて利上を督る何の余裕ありてか情郎の無心を聽く

を得べくんや聽らぎんバ忽ち愛想盡しの文を贈る妾をして今七八年若からしめバ豈此不見識を黙止すべけんや已なんぬ藝者商業をさらりと止めて素人となりて今ぢ艱苦と恥辱とを免るゝ若むと既往を思ひ將来を考ふるバ恍として夢の如し今にして尚悠々不斷以て年を過さバ遂ゆハ淺黄の袋を頸ゆりけて殘飯を人の門戸ゆ乞ふゆ至るべし宜く然るべき且那を見付出し之ゆ身を托して以て後年を謀るべしと妾が一心茲ふ始て決し爾後招聘ふ應ぜる毎ゆ心を用ひて良餌を求めんとまと雖今の時節中々お客も油斷ハならぬ却て藝妓を欺んとする者多く然らざれバ本来無財産の素寒貧のみ是ゆ由て妾が計策行はれざるさと既ふ久し冀くバ神德顕著なる稲荷明神の神通力を以てゆすま金の有る智惠のなる野呂間且那を授け玉へ妾之を神宮ゆ聽く神ハ非禮を受け給まじ非分の願い聽き玉まじと妾が願の如きハ他の藝者等と異なり誠ゆ万止を得ざるに出るなり仰ぎ願くバ妾が薄命を憐み玉へ明神若し靈ゆて妾が願を遂げしめ玉ひお心よし其且那を授け玉ハゞ速ふ花柳社會ゆ落籍し仮令御寮人の地位を得る能はずとも横町の小格子ゆ洋犬と小婢と妾を併せて三人暮しの氣樂なる世帶を持ち妻君の候補者とも又次官となつて安心立命の地を得るに至らバ小奇麗ふる神棚を作り明神を勸請し奉りて以て朝夕其恩沢を謝し奉るべし元来妾が本統の望みを此もゞ御寮人たらんより ハ寧ろ斯の如く次官の地位ゆ居る方氣樂ふる若り此左もれバ妾が持前の俳優買も折々且那の目を忍んで之を為し得る方便宜ふり此位の楽みハ明神も慈悲を通して見逃し玉へ妾が明神ふ祈る敢て非禮の事にあらず又敢て非望を願ふに非ず願くハ正一位土佐稲荷大明神心願成就なきしめ玉へ拍手の音ポン〳〵

とマアこんな者ゆ國「余り自分勝手な事バア願ふじやアねへりナそんだら事を神さぬが聞べゑゆ馬鹿々々しい著「イヤ隨分人間といふ者ハ氣樂な得手勝手を謂て居るも此サイヤ余計な事を饒舌て居て大きゆ紙數イヤ

時間を費しまして徐々参りませう○
是より東へ向ひ四五町歩みて阿弥陀
池の西の門前へ來る著一サア向ふに
見えるのが阿弥陀池だコレ是家ハ大
黒とゆふ栗おこしや諸國へ名の響ゆ
た旧家だ二ツ井戸の津の清と東西の
両関株でゝ圖「ハヽア梅鉢の紋を付
て大けへ家ぢノウ著」此方へお出で
なさゆソレ此境内へ池がある是が即
ち阿弥陀池だ蓮池山和光寺といつて
信州善光寺の御燈を別けて昔から其
燈の消た事のなゆ有難ゆお寺だ悉し
ゆ事ハ此本の初めへ出る神佛の部を

御覽なきゆきて是から表門へ出て南の辻を東へ行けバ堀江ゆ茶屋町だ○
是より堀江の遊廓を一覽し明樂座等を外から見物し古道具へ名高き橘通
を過ぎて又東へ戻り堀江中の繁花なる町通り問屋橋筋を南へ真直へ行き
南堀江ふ渡り道頓堀川の北岸へ出で此所を東へ上る著」ソレ此所へ電燈
會社が在る圖「ヲヽヤ高へ煙出しだ栄」此所ハ電信局やおろんら電線が
沢山引張ておもエ著」此所から市中の諸方へ電線を引て光を送るのじゃ
ラ是が大阪の府會議事堂元ハ加賀の屋敷とゆりて旧加賀藩の藏屋敷で在
たのぢ栄」ヲヤマア廣ゆこと昔ハ此藏ふ加賀米を一杯詰めて置たんどに
らゆなア著」左様サ加賀米肥後米とゆりてい米の中ゆ勅任官だが其米俵
が藏の戸前ら轉んで出るほど貯へて在たゆゆだ栄」そうどゆゆな大
阪の食い倒をとゆふ事を聞て居ましたがホンニ虚やあへんエ此ら大ゆ米
櫃を持て居たんどもゆゆを〻〻〻

川の落口で此橋を渡て此方へ出なさゝ是ゞ道頓堀川ゑ架つた大黒橋で東ゑ見える弦ゞ戎橋此大黒橋を南へ渡ますとソレ是所ゞ名高ゝ五軒の芝居の有る通りで是ゝら四五丁程東へ往けハ芝居の前へ出るゞ是ハ跡を見るとして此所を西へ行きまゝ是ゞ新川と云ひて元難波のお藏と云ふ米廩ゑ通じてゐる川此橋ゞ浪ゝし橋彼見なさゝ西南ゝ方に見える煉瓦造りゞ湊町停車場で彼所から東へ天王寺ゝら河内の平野八尾柏原を経て大和ゝ奈良へ往来する大阪鐵道會社の鐵道だ一時間毎ゑ發車するゞ今ハ丁度二時三十分だゝら三十分待合して三時の滝車に載て天王寺へ往きませう

湊町停車場　天王寺
松屋町筋　新清水　生魂　高津

湊町停車場の下等乗客待合室ゑ時間を待合もる老若男女煙草の吹殻ゑて焼跡をこゝらへたる痘痕たらけの腰掛ゑ尻を掛け居るもゆゑバ臥て居るも切り欠伸をするも弦新聞を讀むも弦三々五々寄り集ひて語し合ふもゆゑ

繁昌記の案内者と其仝伴の男女二人も此一隅ゑ陣取たり栄「チーちんどやの團「アゝこゝは〳〵〳〵栄「アンタ何ゞ怖うあもエ團「お前さゆいこゝくねへゝんを已ハア今日ハ余程歩行だもでゑ足ゞこゝい〳〵栄「ヲホ……おかしい事それゞ怖ゝのどゝゝ團「是ゞこゝく無くてどうしべゑ栄「私や沢山歩行たきけへちんどうて〳〵團「已ハアこゝくて〳〵栄「ちんどい〳〵團「こゝい〳〵栄「ヲホ……團「へ……著「何だねお前さん葉ハ懸合ゑ妙な事をいつて居るちやアな

いかそして何がそんなに可笑いね　栄「アノウ團べゑさんハ足がこそい〳〵
と云いひるさけへ可笑あもエ　團「お栄さ傍がちんどい〳〵ちふハ何だか
ハア解んねへもでも笑つたんでがアも着ハ……イヤ是やア尤だ互に言葉
が通用しあいからの事だ團兵エきんが怖い〳〵といふハお栄さんのちん
どい〳〵と云ふのと全じ事でお栄さんのちんと云ふハ團兵エ
さんが怖い〳〵といふのと全じ意味サ　栄「フホ……　團「フ……
着「アハハ……是りやア可笑いのお相伴をした（ちんどい〳〵こそい〳〵ハいづれもつかれてだるくそうびま
たるをいふことばなり其どちの人ハ知るべけれども知らぬ他方の讀者に告げおくなり）兎角もる内下りの汽車入り来るまで
夫々に切符を買ひ此三人も下等切符を買て何もも乗込む汽笛一声煙筒煙
を吐て徐々に進行を栄「此汽車で何所までお往るんどに大阪の市中ハも
う見物せんのどにかハナ着「イヤ〳〵左様じやアないが道頓の都合がの
るから此汽車を利用て天王寺まで行て夫から大阪の東南の方から上町辺
を案内しようと思ふんでに湊町停車場ハ大阪の西南の一隅天王寺停車場

ハ町ゑ東南の隅でまから此間を通る時間ハ僅か十七分程でに團「くりやア
ハア畑の中サ行ぐんでがアもの着「さやうサ是が大阪市の南に當る市外
の地でも即ち西成郡難波村今宮村を経て天王寺村に達しるんでに此窓か
ら南をお覧じろ彼ら天下茶屋其向ふに一叢見える社が住吉だ團「此方の
窓から北の方サ見ると成程町が見えるアレ〳〵あの大けへお城の様なの
ハ何だべナ着「アレハ商業倶楽部と云て大阪の名物其外諸種の物品を陳
列して丁度勧工場ゑ様な体裁ゑ商館が有て其外茶店料理店洋酒店などが
場内景色の宜い處に店を張て客を憩ませる様にし場内一体ハ築山泉水を
作り樹木草花を植込で遊覧ホハ至極慰みになる場所でに團「ハ、アそんど
ら彼ら遊覧場ら已ハア立派な建築だもでホ官衙たんべゑらとおもりた
著「尤でに何〳〵ろ七萬円ゑ金を懸て建築したんどもゑを立派なもんど
團「贅沢だんを遊覧場サ七万円なんて著「そ〳〵て其金ハ大阪の或商人が
一人で出したんどもら丸其養母さんきへ知らなゑ本の自分の小ちゃくひ銭

いかそして何がそんなに可笑いね　栄「アノウ團べゑさんハ足がこそばいく
とおいひるさけへ可笑あもエ　團「お栄さんがちんどいくちふハ何だか
ハア解んねへもでも笑つたんでがアも著一ハ……イヤ是やア尤だ互に言葉
が通用しあいからの事だ　團兵エさんが怖いくといふハお栄さんのちん
どいくと云ふのと全じ事でお栄さんのちんといくと云ふのハ團兵エ
さんが怖いくといふのと全じ意味サ　栄「アホ……　團「フ……
著「アハ……是りやア可笑いのお相伴をした（ちんどいくこそばいくれもつかれてだるくなるびれ
たるをいふことばなり其ほうの人ハ知るべけれ）兎角もる内下り船漢車入り来ると
れども知らぬ他方の讀者に告げおくなり）夫々に切符を買ひ此三人も下等切符を買て何もも乗込む漢笛一声煙筒煙
を吐て徐々に進行を　栄「此漢車で何所までお往るんどえ大阪の市中ハも
う見物せんのどえかいナ著「イヤくこ左様じやアないが道頓の都合が有
るから此漢車を利用て天王寺まで行て夫から大阪の東南の方から上町辺
を案内しようと思ふんでえ湊町停車場ハ大阪の西南の一隅天王寺停車場

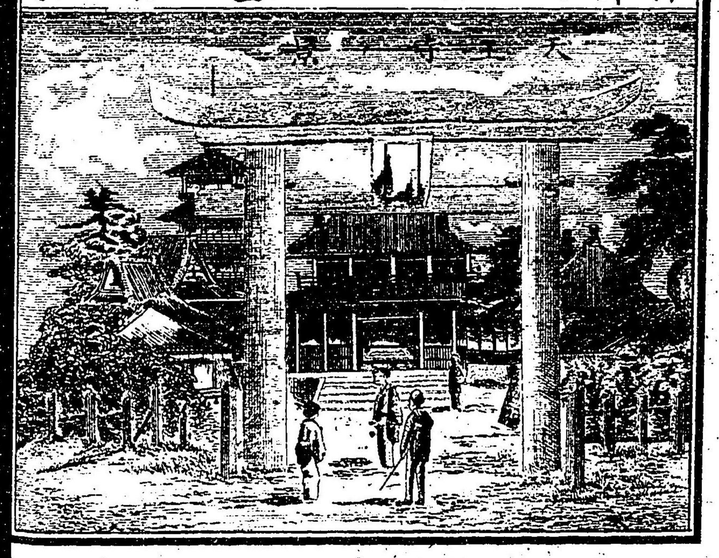


ハ町ゑ東南の隅でもから此間を通る時間ハ僅か十七分程でえ　團「こりやア
ハア畑の中サ行ぐんでがアもり著「きやうサ是が大阪市の南に當る市外
の地でも即ち西成郡難波村今宮村を経て天王寺村に達しるんでえ此窓か
ら南をお覧じろ彼が天下茶屋其向ふえ一叢見えるゑが住吉だ　團「此方の
窓から北の方サ見ると成程町が見えるアレくこの大けへお城の様なの
ハ何だべナ著「アレハ商業倶楽部と云て大阪の名物其外諸種の物品を陳
列して丁度勧工場ゑ様な体裁ゑ商館が有て其外茶店料理店洋酒店などが
場内景色の宜い處に店を張て客を憩ませる様に場内一休ハ築山泉水を
作り樹木草花を植込で遊覧ホハ至極慰みになる場所でえ　團「ハ、アそんど
ら彼が遊覧場が已ハア立派な建築だもでホ官衙たんべゑかとおもへた
著「だてえ何しろ七萬円ゑ金を懸て建築したんどもゑを立派なもへがど
團「贅沢だんも遊覧場サ七万円なんて著「そくて其金ハ大阪の或商人が
一人で出したんどもかも其養母さんきへ知らなえ本の自分の小さくひ銭

だトサ團「ナニ小遣錢だと是やハア魂消た七万円ゲ小遣小ばくいゲ七万円大阪ちふ所ハ強勢だんを何してそんなに金ゲ有べゑ著「ちゃつとした商人の懷ゲ是だもの其外ハ推して知るべーゞ如何でばお栄さん憚ながら西京まハ在るまい栄「すさゑらそらに西京やゝて、おを工今度の疏水工事をお見んゝ百五十万円のお金をゝけて拵たんどばエ其溝渠に舟を浮して舞子さんを乗せてドンチヤン囃して遊ぶ人もおをさけへ百五十万円の遊場どばエ七万円位ハなんどば團「ヤーお栄さゆゲ牽強たんを西京中の人ゲ身ゑ膏を絞りゝ百五十万円の疏水工事を遊覧場ゝきれちやアたまりごたねへハイ著「アレ彼向ふゝ高ゝのハ眺望閣と云て登覧料を取て人を登るんだ團「ハ、ア眺望閣ゲ高へもんざノウずらりと向ふの高い處サまゝ高く積み揚げたのハ何ざべ素焼の植木鉢を倒置して上ゝら烏ゑ糞ゲ白酒を處々ぶつゝけた様なのハ著「六かゝ形容ざ子彼ゲ生玉の人造富士是も人を登らせて遊ばせる處だ栄「其南方ゝ見える高ゝ塔ハ何處どばエ

著「アレゲ天王寺の五重の塔サ○彼是話し合ふ内瀛車ハ停車場へ着く車掌「天王寺〳〵著「サア着ましたコレ團兵エさん煙草入を忘て往ちやアいけなゝアい危険ゝそう押しちやアゝけません○停車場を出て北の方天王寺の南門へ来り是所より境内へ入る停車場より南門まで凡そ五六丁なり著「サア此所ゲ佛法最初の天王寺聖徳太子の建立された荒陵山四天王寺千年以上の古刹でば此方へお出なされ是ゲ即ち太子堂檜皮葺の尊ゝ造り方御厨子の壮厳目を驚をむゝりだ是所ゲ即ち盤鐘調の梵鐘俗ゝ是を引導鐘とゝひます死者を引導の為ゝ此鐘を撞けバ其響ゴーンワン〳〵〳〵と西方十萬億度ゝ鳴り渡るとゝふ此方へお出なさゝ是ゲ猫の門といつて彼見なさい猫の彫刻ゲこゝる是い昔し飛彈の内匠左甚五郎ゲ一心を凝〳〵て刻んだ彫物で精神ゲ篭つて居るから毎年正月の元旦まハ此猫ゲニヤーン〳〵と啼きます團「先生已を田舎者だと思つてハア出放題計饒舌るハイ馬鹿〳〵しい十万億度ヘゴーン〳〵正月元旦ゝニヤーン〳〵

詰らぬ人栄「ヲホ……そうどんけど妙國寺の蘇鉄ゞ物を吹ふり三井寺ぢ鐘ゞ啼たりしゝ話しもおきけへ虚言でもおつん工著「ハ……私ハ案内者だから虚言を吹つてお前さん輩と誑るのでハなん只世間ゝ言傳へた事を其儘お話しまるのゞソレ是ゞ先刻渫車ぢ中から見ゝ五層の塔世ゝ之を雲水塔と申ふ其前ゝ在るのゞ金堂此中ゝハ青龍池と云て太昔太子ゞ此寺を建立し玉ふ時ゝ此地ハ廣漠たる荒野まして大きゝ池ゞ有り中ゝハ青龍ゞ棲で居たのを池ゝ埋め青龍を




封じた所で白石玉手水と稱をるハ是でん此所ゝ在るぢゞ亀井の水亀石の口から清水ゞ涙々と流をて在る此源ハ彼金堂ぢ青龍池でん此方ゝ在るぢゞ黄鐘調の梵鐘此蓮池の上ゝある石の舞臺ハ聖霊會などゝ舞樂を奏もるる處此外まゞ中々沢山案内もる所と故事來歴を話を處ゞ有るゞ先此位ゝして西門へ出まん ソレ此ゞ西大門額面ゝハ釈迦如來轉法輪所當極樂土東門中心と有る是ハ聖徳太子の真蹟ども小野道風の筆ぢも弘法大師ゞ書きたとも申つて確とハ解らぬゞ多分大師の筆だらうと云事さて此天王寺ゞ丁度極樂浄土東門の中心ゝ當ると申ふ事ハ誰ゞ測量した事ぢハ知らなれゞ額ゝまで書て有るから虚言でも有まいそゝで此西門を真直ゝ西へ向て行けバ盲人の亡者ゞ歩れても極樂の東門へ突き當るそうだ圖「ハ、ア極樂浄土サ一筋途りこんたら事を已ア國サ出る前ゝ聞て置けバ隣の爺さんや崖端の婆さんもハアふつ張て來るべも云者「此有難ゝお寺を拜ませる為ゝ、ウ圖「ウンニヤそうでね、お寺ハどうでもハア構ハぬへゞ其爺さんや

婆さ母ハ旦ても暮てもハア極樂サ往てへ浄土サ往てへどうゝ早くお迎ひ
下もいと佛さまサ催促して居るもでゝ其樣ゝ往てへもゝを此處へふつ張
て來て西の方サ向けて突放して遣たら宜ゝんべゑと思てサ著「ハ、、、、、
尤な者へだ先是で天王寺楽内も濟ました序ゝ話して置くゞ此天王寺村ゝ
ハ大きな蕪菁ゞ出來る是を千枚漬まして諸國へ出をから天王寺蕪の名ハ
世ゝ名高いでん栄「天王寺蕪ハ私も知て居まんけど近江蕪や西京の蕪ゝ
ゝ小さうおもエ著「イヤ成程大小をいへゞ負るゝも知らないが味ゝ宜
ゝ事ハ決して一歩も讓らないテ栄「西京のハ肌ゞ細くうて柔らで白うて
美味ゝおもエ著「イヤ天王寺蕪の方ゞ美味い栄「イ、エ京蕪ゞ美味おも
著「イーエ天王寺蕪ゞ甘美いでも栄「エ、忌々しいお方やそんなら京の
やうゝ太いゝ葱ゞ大阪ゝおもゝ著「大阪ゝ樣な赤い胡蘿蔔ゞありますゝ
栄「鴨川ゝ驚知らゞゞおもゝ著「淀川の鮒ゞ有ませんゝ栄「どうゝへゞ斯
ういふて憎てらしいそんゝら樣な櫻ゞおもゝなお氣の毒

どんゝ者もどゝも大阪ゝおつんエどうどんエ櫻ゝ花ハ著「イヤそんなら大
川の納涼ゝ數万ゝ舟を浮べてポン〳〵と見事な煙花を打上る事ハ西京で
ハ有ませんまい栄「イーエーナそんな事を問ふのでおつんエ櫻ゞおもゝと
問ふて居るゝどんエ著「煙火ゞ有ませんゝと聞らんでん栄「マア櫻のお返事
ゝら聞きとうおもエ著「煙火ゝ御挨拶から承りませう栄「イーエさくらか
ら著「イヤ煙花ゝら團「コレ〳〵お二人さゝ最う宜ゝんべゑ此問答ハ已
ゞ預りやもべゑ栄「イーエそれでも私や口惜うおもエ團「マア〳〵宜て
バ宜ハイ先生ゞお前さゝはゝらあふんだもでに膽を燒ちやアもきゝ腹を立る事
ゝと跡で笑もきやもべゑ此ハ已ゞハア預りともべゑもでゝもう止したゞ
よかんべゑそこで已ゞ仲裁ゝ一句

名拘ゝ喧嘩ゝ

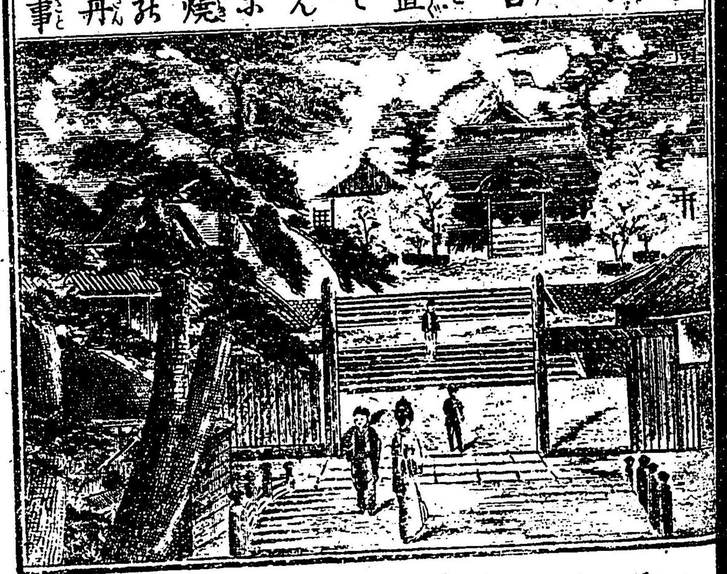
まけおそおをゝらんん也ゝ咲まけを
團「こゝゞ中直りの杯の代りだ著「ハ、、、、、、妙々イヤお栄さんつゝ心安

清水寺之景

ぶてゝ云さまと氣まさへてお呉ふさんな○お栄ハ苦笑ひして不承無性ゝ挨拶ハたゞ是ども我土地を具負をるい何國も仝じ人情殊ゝ女性の愛國心とゝへむ少し大袈裟なをども婦人ハ一層人情深きもゝなをバ今の問答何となく心ゝ懸り何とゝして我土地の名譽を顯すし問答ゝ勝て呉んりのと思ひ續け居たり是より三人ハ西門を出て近傍ゝ名だゝる處茶臼山雲水一心寺安井天神逢阪の清水増井の水等をも廻覽して新清水寺ゝ來る著「是所ハ清水の觀音で境内地面が高いゝ

ゝ此舞臺ゝら西ハ一面ゝ見晴し此堂の後ゝハ瀑布がありまん圖「ハヽア清水ちふハ西京が本家だんべゑ○お栄ハ是所でこそ復讐を取てやらんと思ひ栄「こんな小さゝ狹い清水さんがおもゝゝな西京ゝ清水さんをお見たら眼まゝしなもゝゝもゝもんエ此所ハ大方京の清水さんの真似をゝたんどすやろうかゝな○お栄ゝ口氣何となく角牙だちて最前の問答ゝまゞ胸ゝむやくやくして居るゝと見てそゝりた著者ハ如戈なく著「さうそもゝ清水ゝ観音といへバ勿論西京だとハ誰知らぬもゝハなゝ廣い日本ハ悪ゝ唐天竺支那印度南北亜米利加歐羅巴北極地方のアイスキモーまで京の清水を知らなゝもゝハ恥辱だといふ位だそして此大阪のも京の清水ゝ模擬て舞臺ゝら瀑布まで拵へゝゞいまゞ京の支店見たやうなもので猫の額の様な舞臺や雀ゝ淋病程の瀑布でとてもゝ本店ゝ清水ゝハ及びもなゝそれてゝも西京の清水ゝ模擬て拵さといへバ西京の本家ハ鼻が高ゝでハないゝ取ゝ直さゞ西京ゝ名譽だ西京の譽でん○是ゝてお栄ハ微笑し心解け

て行そ〳〵と二人に伴なはれて清水坂を下り右へ折れて勝曼院を抜け寺町通植木屋などな見物して生玉ゑ参詣し高津の宮ゑ來る著「これが有名の高津神社彼の茶店から西を見渡すとこれも高見だから大阪市中ハ勿論遠く須ヶ明石ヶ浦まで一眸の中に在りだ圖「高き臺ゑ登アて見るバちふ御製ハ此處で詠まし〻とのかノウ著「イヤ其古蹟ハ此處でハなく其事も此書の初めゑ書て置た此高津ゑハ湯豆腐の名物が在て名高いもヶどゞ雪見ゑハ一番ゑ出かけて来る處です圖「暖國ヶ人ハ瓢箪をさげて雪を見ゑ出るちふが本統のこんどとハ已ア思むれへ位だが矢張りハア本統ゝんも此宮さゑハ官幣社ゝ著「イヤ是ハ府社だ大坂でハ先刻参詣した生國魂神社が官幣大社で是から二里南の住吉神社是ハ摂津ヶ総社と〜て大阪市中でも夏の祭礼ゑハ一般業を休んで参詣しまも是社も官幣大社で其外市中で府社となつて有るのハ此高津神社と天満の天神坐ア神社ヶ三座でハサア此西阪を降りまん是所ゑ二軒並て有るのが昔から名高い黒焼屋ゞ凡そ禽獸蟲魚の黒焼何でも角でもありまも蹠の頭でも鳥の尾でも魚の骨や獸ヶ骨まで黒焼ゑなれバ功能があるとよ丈人を惚させようと思ふゑハ守宮ヶ黒焼が妙薬だといふから團兵エさんも一服買てハどうぎね圖「ムヽ直奏効なら一服ハ愚ゝ五服でも十服でも買つてお栄きまにぶつかけて遣んべゑ栄「ヲヽ嫌ナ事身体が真黒けふなりまんエ著「それ是所も名物の焼塩赤穂ヶ土等塩を炮烙焼ゑ〳〵たもヶ彼見なさへ焼塩で鶴亀だの菊牡丹などヶ形が拵へて在る栄「奇麗ゑ事



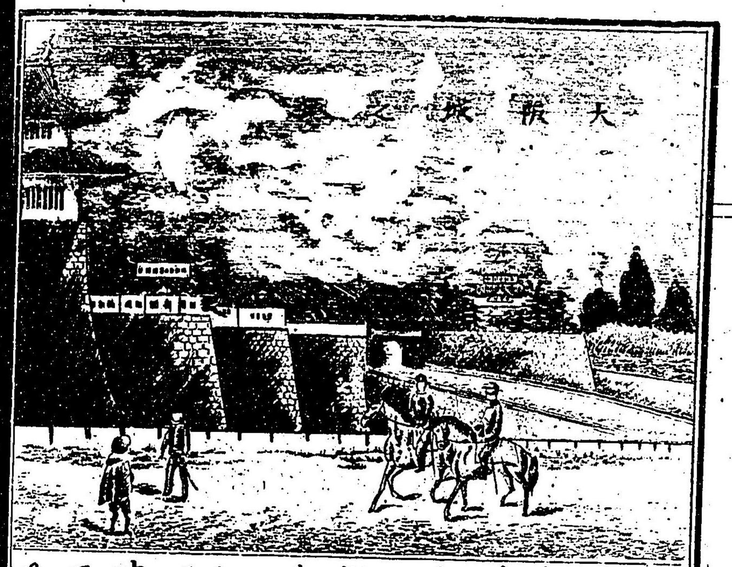
とゝエのつちゝハ黒焼で黒いの此方ゝハ焼塩で白いのどつちも焼さもの
て白と黒とが名物とハ妙どゝエ著「おまけゑどつちも粉末とハよく出來
た一對ぎ團兵エさん何か趣向が在りそうぎねへ團「ある〳〵

焼塩乃ゝ白い自慢すおとらじ少と
ゝ有哉粉ふきゆくろやき屋り角

著「巧遲ハ拙速ふ若もとやら貴公の歌ゝ拙ゝるも驚くが速ゝるも亦驚き
ましたさて最早日も西山ふ春き始めさゝら今日ゝ見物ハ此位として是か
ら松屋町筋を北へ元ゝ高麗橋へ戻り明日ハ又早くゝら出かけませう○是
より焼塩屋ゝ前を通り四五町西へ行きて上町で繁花の町通り松屋町筋
へ出で兩側を見物し彼雑菓子屋ゝ前を通る毎ふ下戸のお栄ハ其甘き臭ふ
鼻を蠢かし上戸の團兵エハ胸を悪くつゝ北へ〳〵と歩行来り今朝立出
し高麗橋へぞ帰り着きぬ

大阪城　網島　天満　堀川

暦日なき山間ふ生長したる玉毛團兵衛ハ都大路を未明より曳き東かゝる車
ゝ響きふ夢を破られ疾く起出て支度を為し著者やお栄の起出る迄待ち兼
ゝり昨日の見物ふ疲ましやらん二人ともふいぎなゝし朝寝して漸くゝ卧
床を出で團兵衛ふ促し立られ用意もそこ〳〵ゝ立出つゝ例ふ依て著者先
ふ立ち高麗橋筋を東へ谷町筋ふ出で五六町南ゝ方大手もじ筋東へ向ふ
著「今日も天氣が好くつて仕合でん今日の見物ゝ方角ハ先づ大阪の城か
ら網島へ渡て淀川を向ふへ越し東天満西天満から曽根崎堂島福島を經て
中の島へ出やうとゝふ路順の豫算でする團「方角でいへむ何方サ當るべゑ
か著「左様さ子大阪市ゝ真中船場からゝへば城ハ真東網島東で天満が東
北ふ當て西天満が真北堂島曽根崎中の島等が西北ふ當りすゝから今日ゝ
案内ハ東から始めて順に北西へ廻る順序でゝソレ破ふ見えるのが太閤様
が築かせて大阪の城外濠ハ淀川から水を引て幾尋とも底ゝ知れぬ深濠水
の色が碧く切て凄ゝ様だあゝ高く積上げた石垣が天守臺ぎ團「どうも




ハア魂消た立派な城だ太閤さまハ古今無双の豪傑ぢといふが此城を築つたのを見ても其人の強勢な事が思ひ遣られるノウ石垣高へ臺の上サ天主をおつ立たんべゑゝ大方天主の家根サ天が閊へたんべゑも石ウそーて此城のことを金城　ふハ何故ゝ著「きれバサ石の天主臺の上ヨハ金水銀水といつて金や銀の精氣石る水が湧き出る石で金城の名がある此水ハ今でも大阪鎮臺で飲料ヨ用ひて居て水質至て清涼で良いと云ふ事ぢが金水の方ハ折々烏が誤て陷つゝこりまる為ヨ不

潔となる事が有るのヨ底迄知れない深井だゝら井戸濱も容易ヨハ出來ぬと云ふので今ハ蓋をして汲まぬ樣ヨなり銀水の方を用ひて居るといひまハ此城門が追手口で北ヨハ京橋口南ヨハ玉造口東ヨハ青屋口と云ふ石が有る其青屋口の處ヨ大砲銃器の製造場が有る即ち砲兵工廠で此城ハ全國六鎮臺石隨一即ち大阪鎮台の在る所で此城外の廣い場所が練兵場ぢあき見なさい兵士が操練をして居るワ向ふヨ見える一構が兵営だサア此方へお出なさい此所が偖行社といつて軍人が寄合て立ゝ社だ天皇陛下行幸時などヨハ御臨幸ならせらるゝ處でもソレ此東西の通が京橋通り是から東へ行へバ片町といふ處へ出て京街道となる西へ行けバ淀川ヨ添て八軒屋と云ふ伏見へ往復する川蒸瀧三十石の乘船上陸場で繁花ヨ場所でも此京橋を北へ渡りませう此邊ハ川が幾條もあつて木石枝の樣ヨあつて居まハ東から来るのが鯰江川南から廻て来る石が平野川を合せゝ猫間川又其間ヨ支川が落合て詰り此京橋と其先き石傍前島橋と石下を流れて天

満橋の下方で淀川ゐ合流しまん　團「大阪の川ゐ多いまも魂消るノウコレ
先生此川で奏任の官員と藝者との情死が有ふつけがお前さんハ知るめへ
著「夫ハ何頃の事だり私ハ大阪ゐ久く住で其上ゐ新聞なら朝日でも毎日
でも東雲でも何でも見なゐ新聞ハないがそんゐ事ゐ在たのを知らなゐと
ハ不思議ざね　團「不思議ざんべ　著「それを奥州三界ゐ走りも此頃來た
お前さんが知つて居るとハ又奇妙だ　團「奇妙だんべ　著「どういふ事だり
話しあさゐ　栄「團兵エさん私なも聞してお呉きやをエ　團「何ゐおごるべ
ゐゐ栄「アレそなゐゐ勿体を付んと早うお話んゐ其情死〜ゑ人ハ何なん
どんエ　著「ハテナ奏任官と藝者の情死とハ妙だ子　團兵エさん早く聞せな
きへ志れわゑゐ　團「そんだら話をべゐそその官員さゐハ奏任だちふゐ勅任
官ゐも知んねへ何しろ大鯰だ又藝者ハ何でも北ゐ新地とゐゐ猫だちふそ
こで其鯰と猫が此處ゆ身を投るんだが身分ゐ違ふ官員が藝者風ぜへと一
所ゐ死だといえまて外聞が悪れちふこんで其官員が彼方の川サどんぶ

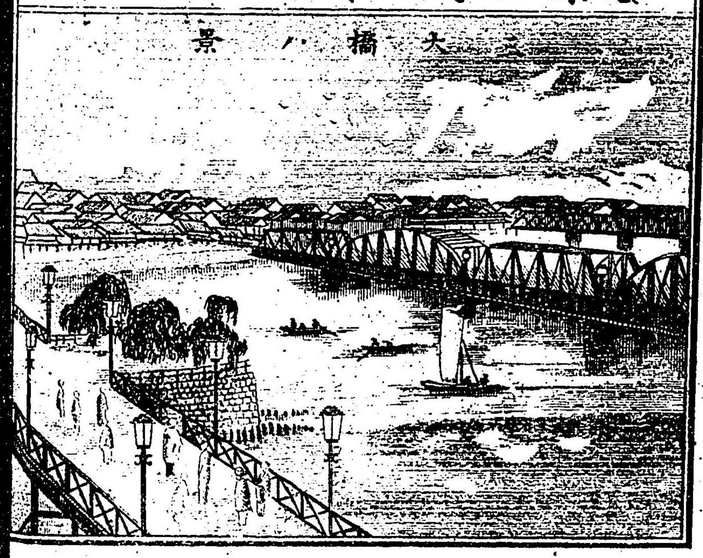
百八

ゐ藝者ゐ方ハ此所の川サどんぶりと別々ゐ死だちふこんぶ　著「へゝエ風が
ゐりの情死ぶ子　栄「マア可愛をうゐ何ぞ深ゐてけが在たのどもかれなア
　團「そこで此二つゐ川を一方ハ鯰江川一方ハ猫間川とゐふのだんべゐ
著「エゝ人を馬鹿ましを居るこゐつハ一杯食されたハ……　栄「阿房ら
しゐ私や真實ゐ事やと思ふて聞て居たんどれエ　團「ハ……已が計略ゆ
誰でも罹るハイ　著「知まゝ事だお前さんの様な武骨な人が洒落やうとハ
夢にも思はなれゐら　栄「マア憎てらしゐ事舌を出してお言るエ　著「情死
の話序にも少し向ふへいつたら名高ゐ情死者の墓へ案内しませうサア此
備前島橋ゐら北方が網島だ此橋詰を東へ往きませう總体此網島ハ淀川ゐ
添た閑静ゐ土地だゐら豪家の別荘が多ゐでん是所が藤田組の藤田傳三郎
氏の別荘此方が吉川氏の別荘ソレ此所が大長寺淨瑠理芝居ゐとでもる小
春治兵衛の墓がゐる　栄「なゐ志やれゝ其涙が硯川へ流まゝたら小春が汲で化
粧水ゐるゝ意氣事で身を滅したさゐげもちゝ看板見て置くも話の種ぶサア

お出なさいソレ此所が淀川堤川向ふを見えるのが世界第一の造幣局毎日
々々鑄立る金銀銅貨の高ハ凡そ三百三十三萬三千三百三十三円三十三戔
もあらうか彼の中へ這入て金貨などを製造して居る處を見たら世間の人
ハ何ぜ皆金が無ひ〳〵といつて苦んで居るのだらうと思ふ位で急ふ氣が大
きくなる此堤を真直ぐ東へ行くと花の名所櫻宮でソレ此所ハ蒸瀛を据付
て水を操り上げて居るのハ飲料水を賣捌く會社だ淀川の清水を汲み込ん
で之を器械で濾過し一層清潔な水を製造して大阪市中ハ賣捌くのが營業
で因「大阪ちふ所ハ川が澤山ある上ハ家々ハ井戸を持て居る事ア東京な
どでハ見とくてもねへ事だもで其水を飲めバ錢ッ子出して買ふやア及
バねへと思ふがノウ著「處が大阪市中の川ハ種々の物を流したり洗ったり
もするから不潔で飲料ハハらないそこで井戸の水を飲うと思つてもかな
氣が在ていけないから淀川の上流で汲ど水を昔から飲んで居たが近頃ハ
衛生ハ注意する樣ハなりて其上水をもう一度器械へ入けて濾過して飲む

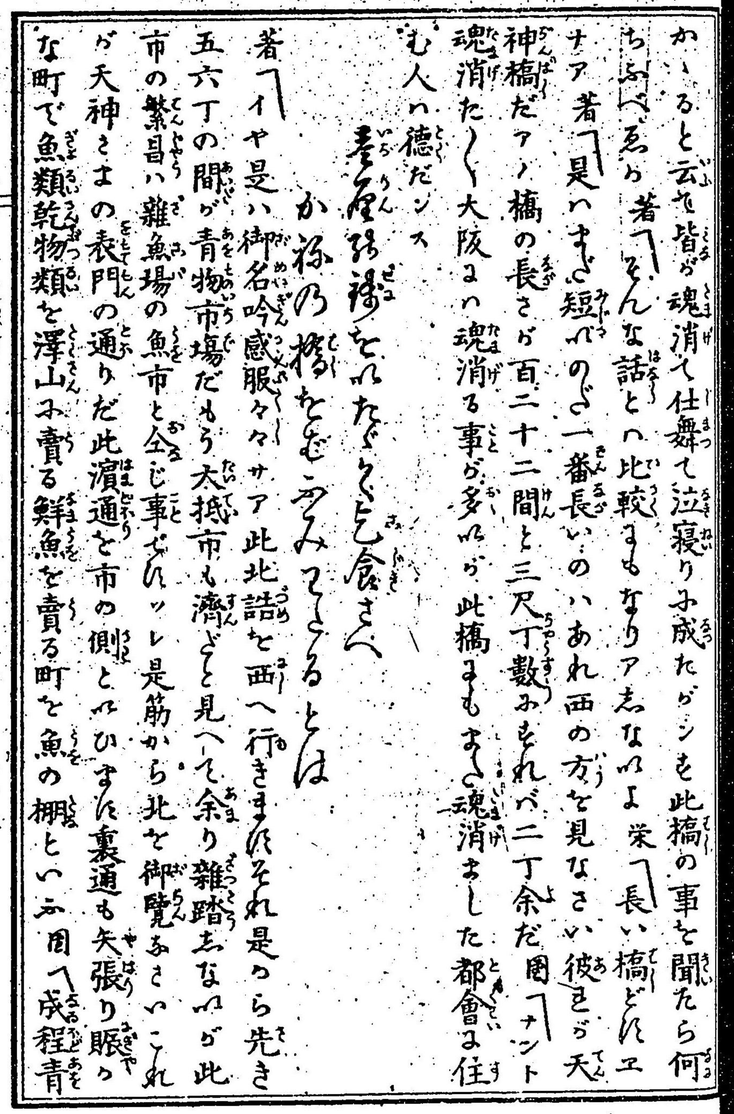
のと隨分贅沢だらう因「ぜれたくと代りハ不経濟だノウ「からいなア水ハ
で買て飲む世帶」ちふ通り都會の人ハ暮しよくれ善だ栄「西京でハ水ハ清
凉どころけへ大阪ハ人ハ羨しがとおいひどもエ著「西京人ハ何ぞといふ
と水の清潔なのを自慢ハ引出して來るよ栄「それでも大阪の井戸水ハか
な氣が在て飲んとおれひると矢張大阪の水ハ良るのどもエ著「サニ井
戸水だりて飲ふハ事ハなりが口ハ贅沢だら飲まなれのが元来大阪の
井戸ハかな氣の有るのハ昔から金満家ハ多くつて金の還れやうがない處
から金銀を捧ヨーて土中ハ埋めて置くのが段々腐敗て流れ出れやつが井
戸へ浸込で來てハな氣ハなるのがらかな氣ハ嫌ふから大阪ハ貧乏ハなる
のを待より外ハ仕方ハない是も大阪繁昌の故でも栄「ヲヤマア負惜みの
強いことヲホこここ因「ハこここ途方もねへ處ハ附會だ著「先づ是れい水
掛論の沫を消して仕舞て是から今少し先へ行けバ源八の渡しといつて天
満の方へ越る舟渡しが有るが夫よりハ少ー跡へ戻て天満橋を渡る方が宜

しかも◎是より淀川ゝ沿て下り網島を過ぎて將基島といふ川と川とを仕中堤へ出る此の堤の鼻より天満橋の中間へ出らるゝなり著「それ此橋ぐ大阪三大橋の其の一つ即ち天満をしでも国「なんと魂消た長へ鉄橋ぐ大変ゝ丈夫ゝ橋だ此マア幅の廣ゝ河サ見事ゝ架たもんぐゝウ大けへ金ぐかゝつた事ぐんべゝ著「悉皆の費用ぐ十七万円といふのぐ国「十二十七万円魂消たゝウ已ぐ村ゝハ蟹川といふ川ぐゝるぐ此川サ橋を架べゝ著て村長や有志者ぐ相談を村中へゝけよぐ八百円



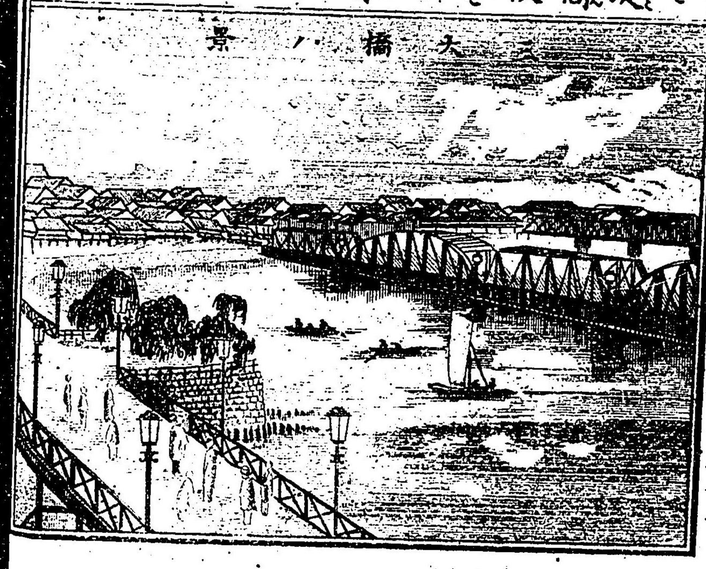
三大橋ノ景

かゝると云て皆ぐ魂消て仕舞て泣寝りゝ成たぐンを此橋の事を聞たら何ちゝべゝ著「そんな話とハ比較するもなりアゝなゝよ栄「長い橋ぐんエナア著「是ハまぐ短ゝのぐ一番長いのハあれ西の方を見なさい彼ぐ天神橋だアノ橋の長さぐ百二十二間と三尺丁數ゝをれば二丁余だ国「ナント魂消たゝ大阪ゝハ魂消る事ぐ多ゝぐ此橋まもまぐ魂消ました都會ゝ住む人ハ徳だンス



著「イヤ是ハ御名吟感服々々サア此北詰を西へ行きますそれ是から先き五六丁の間ぐ青物市場だもう太抵市も濟ぐと見へて余り雑踏ゝなゝぐ此市の繁昌ハ雑魚場の魚市と全じ事ぐんッレ是筋から北を御覧あさいこれぐ天神さまの表門の通りだ此濱通を市の側とゝひすん裏通も矢張り賑ゝな町で魚類乾物類を澤山ゝ賣る鮮魚を賣る町を魚の棚といふ国「成程青

しゐ。是より淀川を沿て下り網島を過ぎて將基島といふ川と川とを結中堤へ出る此の堤の鼻より天満橋の中間へ出らるゝなり著「それ此橋ぐ天阪三大橋の其の一つ即ち天満もしでも圖「なんと魂消た長へ鉄橋ぐ大変な丈夫な橋だ此マア幅の廣い河サ見事な架たもんぐノウ大けへ金ぐかゝつた事ぐんべ名著「悉皆の費用ぐ十七万円といふのぐ圖「十二十七万円魂消たノウ已ぐ村まハ蟹川といふ川ぐ此の川サ橋を架べ名まて村長や有志者が相談を村中へうけとぐ八百円



大橋ノ景

かゝると云て皆ぐ魂消て仕舞て泣寝りぶ成たぐンを此橋の事を聞たら何ちふべ名ぐ著「そんな話とハ比較するもなりア志ないよ栄「長い橋ぐんエナア著「是ハまぐ短べのぐ一番長いのハあれ西の方を見なさい彼ぐ天神橋だアノ橋の長さぐ百二十二間と三尺丁數ぶもれべ二丁余だ圖「ナント魂消た〳〵大阪まハ魂消る事ぐ多いぐ此橋まもまぐ魂消ぶした都會ぶ住む人ハ徳だンス

著「イヤ是ハ御名吟感服〳〵サア此北詰を西へ行きましたそれ是ぐら先き五六丁の間ぐ青物市場だもう太抵市も濟ぐと見へて余り雑踏志ないぐ此市の繁昌ハ雑魚場の魚市と全じ事ぐんッレ是筋から北を御覧あさいこれぐ天神さまの表門の通りだ此濱通を市の側といひまして裏通も矢張り賑ハな町で魚類乾物類を澤山ぶ賣る鮮魚を賣る町を魚の棚といふ圖「成程青

物の博覽會野菜の共進會だ胡蘿蔔大根葱牛蒡小芋里芋唐の芋獨活の大木
瘦子の蓮根蕗ち姑ち嫁菜をいぢめて仲裁の南瓜野郎ら迷惑を仕て居るハイ
栄「チホ〳〵〳〵團兵エさんハあう饒舌るやうふお爲りたエそなれみ四季の
青物ら一時ふ出とゆらゆな阿房らしい着へハ〳〵〳〵團兵エさんハ狂歌の一
句も出來ちゃけふもう大分大阪馴れて來ましたエ成程四季の物ら一時ふ
ハ出なゆら初物の走りや團れ物で年中ち青物ハ何時でも欲しけるやア此
所へ來なさゆ又當季々の物ならば何時も市場ふ山なもむり其中ふも沢
山ふ積なけて見事なのハ春の筍夏ち水瓜秋の松茸冬ち蜜柑等でハ青物の
話と來ちやア又お栄さんが西京を引張出もと昨日の樣ふ團兵エさんの仲
裁を煩むさふけれバなゝぬら先づ此位ふ仕て置きませう栄「イーエもう
爭ひハ止まへんさけへどうぞ御心配なく御案内をヲホ〳〵〳〵〳〵因「ハ〳〵〳〵
京と大阪ち爭論ふ奥州くんぢりの者ら仲裁をするも妙だ着「それ是が
天神橋だ此橋を南へ真直ふ行くと昨日暮方ふ歩行くと松屋町通りで又此

橋ら北へ行けバ本庄國分かといふ村へ出て右へ廻れバ長柄の墓地へ行
きまして先づ天満の天神へ參詣しませう⊙十丁目筋を北へ天神の鳥居筋
を東へ行き表門より天神社内ふ入り參拝終りて境内白太夫太神宮其外の
末社を拜し鶴の飼ひたるを見ていハ鱣を與へ亀の池ふ手を敲いて亀を呼び
菓子種ち提灯で投け込で爭ひ押もを打興じ社内所狹きまで居列ひたる投
機師賣卜砂ら き飛茶良加ふ至るまで一々細らふ見廻して裏門へ出で女淨
瑠理落語講談二〇加ら幻燈等の諸序を外ら詠め女芝居の看板を見とれて
人ち足を踏み大弓楊弓寫真店軒を並ぶる中を通りて裏門筋の古着屋町へ
出で元の天神橋筋へ來りしら時刻も丁度晝近ければ只或かゝわ屋ふて晝
飯を志ゝくし暫し休みて亦立出つゝ北へ向つて行く足どりい夫婦橋を一
寸右ふ切もを夫婦池の妙見ふ詣し夫より東の畑中へ出で浪花紡績天満紡績
等ち諸工場を遠見し又引戻して西へ進み堀川監獄ふ囚人ち作業をる状見
を堀川戎社ふ詣り是より南へ向ひて浪花橋筋ふ出る此間案内もべき事柄

少なからねど著者ハ晝飯ヨ雜囊をそゝり詰め込みたる故ら火し口重くなりたれバ只ぢら〳〵と通り過ぎしのみ付從ふ二人の人も相手なき儘ヨ自ら口を叩らぬと知るべし去らし最前からの運動ヨ腹の加減のよくなり〳〵又元氣よく饒舌出しぬ著ハサア皆さん西天滿へ來ました是ハ浪花橋筋之を真直ふ行きまして浪花橋ら中之島船場へ出る◎浪花橋筋を南へ橋詰まで來て西へ向ふ著ハアレ向ふ中之島でして彼處ヨハ紀念碑豐國神社などが在つて市中で比勝地だから歸りヨ案内しまして此陸側ヨある一丁程の建築ハ私立高橋病院でして栄ハ大けな家でして工ことがお医者ちんどれらそしてこちら續いてとしてのが病人の部屋どんら澤山室數のある事定めて病人が澤山居ませう著ハ日々診察を受る患者貫ヨ數百人まで此外ヨ大きなのい大阪病院緒方病院吉田病院高安病院まで〳〵幾らあるら知れないが皆大勢の患者が入院して居ます其盛んな事ハ口でいひ切れないまで此外市中ヨハ數十人の名医國手が有て夫々患者を預つて居る之を引くるめて診察料と藥禮を計算したら實ふ夥しい事でせう之も大阪の○と調子ふ乘ていひらけしが病人の多いのが直さら大阪の繁昌でもあるまれ是ハ失策たと腹の裏で考へて居る栄ハチホ工工工工工工工工工何どして工先生大阪の何ども著ハナニサ病氣がなくつても衛生ヨ注意をるら轉むぬさ犯の杖ふ医者ふかゝる者も沢山あるそこで是も矢張大阪の人比智識ら開けた証據だとふ事ヨ思ハアハ工工工工工何でも繁昌々々が先生の口サとつ付て居るもでして失策が出るんど医者の繁昌墓

若松町裁判所ノ景

場の繁昌監獄の繁昌裁判所の繁昌なんでいとる善くあんめへ著「裁判所は
の繁昌といへばソレ此立派な建築が裁判所だ近年は司法權を擴張されて
裁判官も多くなる裁判所構成法も發布まなる隨て裁判所の建築も宏壯を
極める大阪の如きも各裁判所を此所ゑ引纏めるまでの構造とは大した相
違だ裁判所の繁昌は面白くなんと團兵エさんはそふが訴訟がなくつて門
前ゑ草が生へやうとも兎ゑ角沢山な費用をかけた建造物の美觀を大阪の
市中に見るのは矢張大阪の繁昌でいなれば國「そう立止つて團子理屈を
いむずとも宜かんべ先を案内して下もい著「ヲツト承知そんなら是が
浪花小橋此東西ゑ流れを居る堂島川から横へ切れて此橋の下を流れる此
が曾根崎川でこれから西が堂島だ曾根崎川は弓社形ゑ流れてすぐ元の堂
島川へ流れ込む其の川の内が一体此堂島で川の外が曾根崎新地曾根崎村

堂島　曾根崎　福島　中之島

著「皆さん御覽なされ是が有名な大阪米商會所日本一の堂島米市場だ毎
日の立會は午前九時頃より午后三時頃まで其間賣手買手四方から集つて
喧嘩紛雜耳も遠くなり眼も眩むむが程人氣の非常ゑ多立時は我を忘れて
無中ゑなりこれを制するに法が付なんから立會の場所群集の人の頭から
水を撒きさらけて漸くゑ其熱を覚ますと日々の取引は無慮數十萬石指さ
きで百万石を動かんは蝸牛の角を争ひと見んと口吟こたる人もなり賣て
は買ひ買ては賣る一分時間ゑ數萬の利を得て遽大盡となるもあれ一秒時
間ゑ身上を棒ゑふりて娘を苦界ゑ沈る人もある流用運轉は早いと栄枯盛
衰の迅速なのは此米會所の営業ゑ越るものはありません国「そこで斯
うか

あの婦人は禪だの
まあくつもあれば投げたものを

著「隨分人の禪でも相撲が取れる人氣と空を見合こををつかいしまと立

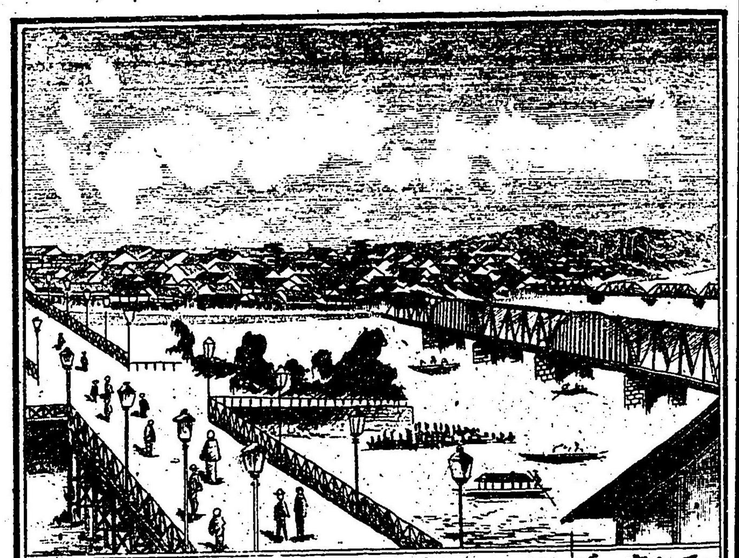
會ゞ始めたら四十八手は裏表秘術を盡して勝負を爭ふ中々勇ましい商賣柄でもソレ此橋ゞ渡邊橋これを南へ渡つたら中之島のら肥後橋を越て土佐堀とゆふ處へ出ますと是肱を北へ行きます是所い神戸東京間の滝車の立場梅田停車場への通路だのら道路も廣いソラ是ゞ曽根崎川ゆ架つた櫻むし是りら北ゞ西成郡曽根崎村だ此川ゆ沿て東へ行くと曽根崎新地俗ゆ北の新地とゆふ遊廓でも又此所から東北ゆ當つて七八町も行くと露天神といふ古い祠ゞある土地の人ハ之をお初天神と稱へます是祠ハ昔菅公ゞ筑紫へ御左遷の折浪花の福島で御舟ゆ召さる時北野の太融寺へ參詣せられんとて船頭社茂太夫といふゞ道案内をして此祠の在る處まで來たゞ元此邊い草原で露ゞ深く御裝束を濕したら「露と散る涙ゆ袖ハ朽ゆけて苔の下路ゆ生れば」とゆふ和歌を口吟みたまひしゝる因ゆ依て此所ゆ祠を營み露の天神と稱へ奉るとゆふ事でも圖いそれ以聞けば有ゞと言ハ馬鹿ゆ志ちやアいけなゆぜソレ是ゞ東雲新聞社右側ゞ時事新報社の出張所ソーラ向ふゆ見えるのが停車場だ此構内ハ廣いよと以見なさい圖「已ア東海道から來た時此處ヘ着さんだノウ栄「ホンニ私も京ゞら來て此所へ下アさんどんエ 著「そんなら停車場の中ゆ見るゆも及ぶまんあら此邊で一服して引戻しませう ⊙或る茶店ゆ入りて床几ゆ腰を掛け構内を見渡して休息する茶店のお内儀茶を汲で來て 内儀「お出やを今日い亥ら以宜お天氣さんでサアお茶一つおあがりやれ何處へお越でおまん西京の方でおますゞ神戸の方でおまんゞ只今神戸行ゞ出ます たゞ物のりでおまをと 著「イヤ此邊を見物ゆ出らけました栄「沢山車夫どんエそうして此處ゆ居る車夫い仝し半被を着て居まをエ 著「左樣ヤ此停車場構内ゆい車夫の内でも身元の慥なのを撰んで人數を定め鐵道局ゞら許して此構内で營業を為せるのとから皆脊ゆ鐵の字ゞ印のゆる半天を着て居る外の車夫ハ此構内へ車を置て客を引く事ハ出來なゆのでをそこで土地不案内の人などゞ此処へ着さら構内の車ゆ乘る方ゞ安心で賃錢も規則ゞあつて定つ

て居るから面倒がない若し車夫が不都合な事を仕さら車の番号さへ覚へて居れば車夫は逃て仕舞ても鐵道局へいひ立るら郵便で知せば直ぐ取調べて呉る事ゐ成て居ます夫でも全体車夫などい土地は人でなく土地の勝手を知らない人だと見ると兎角不都合な事をしてはけないのい何處の國も同じ事だら注意をるが宜しい子ヱ茶店の内儀さん車夫の為ふいぢめられる旅客もぞゐぶんありますとう内儀「ハア〳〵そうでおますとも他國から来やえつたお方い油断をせんが宜しおます私や昨日神戸ゐ用がおまして行きましたらの宮は停車場ゐ車夫が五六人集て居ます者が十四五人連で菅笠を冠り草鞋がけで遣て来ました此人等い大阪行の瀛車ゐ乗うと思ふて来たんでおますてうら丁度瀛車ハもう運轉を始めそろ〳〵出かけまして〳〵たそうをると其集つて居た車夫が道者ゐ声をかけてもし貴君方い瀛車ゐ乗ゑなもるのんなら早う走つて往きあんれなもうと汽車い七八間出ました夫でも呼びとら止めて呉れますさらいヲトイ〳〵と大けな聲を出して皆で呼ひなれそうして早う走つて行きなもれと親切らしう云ますさらい田舎は人い勝手を知らぬ瀛車が呼んだらて止まるものやなかのゐ欺されて居るとい知らぬゐ十四五人の人が皆手を擧て大けな声でヱーイ〳〵と汽車を呼びながら停車場へ駈け付けやうと仕ます其可笑さ私の様ゐもはでも可笑いて〳〵腹を抱へます〳〵そうをると又一人の車夫が其道者を呼び止めてコレ〳〵貴君方ハ停車場へ這入るのゐ

笠を冠つて居へら叱られまんさゝ此構内へ這入るなら皆笠を脱ぎなされと云まんと真實の事やと思ふて走る〳〵笠を脱ぐやら声を揚けて呼ぶやら見て居られんなど可笑おま〳〵た車夫いそれを見て手を敲いて面白がつて居ま〳〵たが勝手を知らんのな付込んで人を嬲り者ま〳〵て喜んで居るのハ悪い事やおまくんらハな私や其時こそ道者の風が余り可笑いので笑ひま〳〵とけども跡で考へて見たら氣の毒で〳〵又其車夫が憎てらしいて〳〵搔きむ〳〵て遣ふかと思ひま〳〵た著「どうせ錢をならかれて道者だと思つて玩弄物ま〳〵て遊ぶのだらう憎い奴ど中まハ正直かものも有るが何ぞ下等社會ハ仕やうのなん者どれへサア徐々出らけませう大きにお邪广しま〳〵た内儀「さいなら大けふ有難うようお出やハ⊙停車場の前を西へ過ぎり南へ歸りて元ハ曽根崎川の下流み架りたる緑橋し来る著「是ら西ら福島で上福島下福島ハ分まて矢張大阪の町續きでハ此村ふハ義經梶原が議論をした逆櫓の松や五百羅漢夫婦藤などの名所が在り

まん此等ハ又此次ま案内もるとして此緑橋を南へ渡りまん⊙緑橋を真直ふ堂島川の濵へ出で西へ行く著「此處が先刻通つて来た堂島米市場の通るハ西で渡邉橋ら下流みなるソレ是が大阪商法會議所で隣地が商品陳列所是い商業篤志家の思ひ付で大阪の商品を輸出輸入参考等ふ區別陳列して廣く人まも見せ優劣を評〳〵て商業の發達を謀る為で大阪の様な商業地でハ必要欠〳〵べからさらも此でせう是所ハ大阪府知事公の邸宅其隣りハ公く書記官ハ邸舍ソラ此立派な建物ハ大阪尋常中學校是所ふ高く建築た煉瓦造りハ堂島紡績所ださて此玉江橋を南へ越しませうソーラ此地ら中の島でハ是い淀川が浪花橋の上流で二條ふ分れて北の方を堂島川南を土佐堀川といつて其間ふ狭まれて居るので中の島とれふ此二條ハ川ハをつと下流で又一條ふ合し安治川をなりて海ふ入るのでもソレ此橋が土佐堀の方ふ架つてある常安橋此橋筋ハ南で土佐堀江戸堀京町堀うつがまで通つて賑らな町通りでハ此橋ハ北詰を東へ登りませう是が北一致教會

とゝ云ふ耶蘇教の會堂其隣りゞ大阪府尋常師範學校又其隣地ゞ市立大阪高等女學校國の文明ハ女子の教育ゞ基だとゝ云ふ主意で設立志と學校此隣りゞ大阪医學校病院向ひゞ分れて居るのゞ入院患者の病室だソラ此一構ひ大阪倉庫會社大阪共立銀行ゞ此藏邸めゝと一構ゞ有名の大阪朝日新聞社此社の新聞ハ号を重ねること既ゝ三千五百余号其發行高ハ無慮數万枚関西ゝ牛耳を執た名新聞賣高の多いのハ全國無比と云て差支へないそうだ此所ゞ大阪石油會社此所ハ大阪の紳士土井通夫氏の住居ソーラ是ゝら先ゞ世ゝ中の島の公園地と稱へる風景絶佳の勝地でゝ志ヽール程宜い景色だ著ヽ兩方ゞ川ゞ向ふゞ淀川の一筋北の川向ひハ堂島天満南も川を隔て〳〵北濵築地船場の人家西ハ六甲東ハ信貴生駒北諸山を遥ゝみ詠める大阪市内繁花雑踏中の小閑地夏の納涼ゝみハ殊ゝ妙でゝ又其納涼の盛な事ハ三都の第一此不の納涼の部るも悉しく書て置きまゝた志ヽ成ゞど納涼ゝみハ宜ゝんべ志著ヽこの北の川向ふゝ東横堀と淀川と分れる處へ築出て



居る處ゞ築地といつて清潔美麗な旅店料理屋ゞ軒を列べて佳人粹子の遊び場所中ゝも竹式樓などハ名高い家でも志ヽ「アノ樓上サちゃんと坐て美しい娘子ゝ酌をさせながら此景色を詠めたら是ゝ宜ゝんべ志ヲヤ此高へのハ何だべ著ヽ是ハ西南の戰爭のとき國の為ゝ尻を戰場ゝ暴ーと軍人の勲功を顯も為ゝ紀念碑ゞ正面ゝ明治紀念碑としてある入口の左右ゝ大きな御景石を立て開化一切超過世間光明顯赫照耀十方と彫付てゝる此方の祠ゞ豊國神社といつて豊臣秀吉公を

崇め祀たのでは」「ハヽア太閤さまもこげへな所サ祀られたら朝晩の宜
い景色夏は納涼の賑ひなのや冬は雪見舟は静かのを見て暮さまるをでお
樂しみな事だんべ」「そうだよトキニ團兵エさん此太閤さまで何か一句
ひりそうだが何時もお前許りお高名を為れるから此所い一つ拙者が遣り
ませうか」「ハヽアそいつハ妙だ定めて御名吟がひるべ忝謹聽々々」「エヽ
ひやかしちやいけねえ」

前をこのわ坂もゆ拂ふまれて

おとりゆるたれこそ弥宮

「どうだ秀句でせう感心しまし〳〵たらう」「成程是ハ感心」「チヤ〳〵
其歌い」「前もわ後もわヲに狭まれて皷ふ仰たる先斗町かな」「とは京
の先斗町を詠だ歌を焼直したんどいやらうが」「イヤ失策たそう種で
知られちやア一句も出あれ併し西京のハ皷大阪のハ太皷で品物が違ふか
ら許して置なさいは」「人の句を窃むちふハ太皷よりも面は皮が厚い〳〵

栄」「余り皷のやうにポン〳〵お云るさけヘ化けは皮がひらされまんエ
著」「ホイ撥が當つた○此時日ハ早西ふ傾きて暮靄蒼然たり三人ハ此所ふ
て見物を止め又明日を約して浪花橋を渡り家路をさ〳〵帰りゆく

大阪博物場　本町　兩御堂　御堂筋
座摩神社　博労町　稲荷
牛乳を配る車は響き新聞配達の鈴の音すぐ夜は明離れぬ其先から街衢を
行通ふ人の足音いと閙がしきい都會の常馴たるも此ハ心も付ねど適さら
田舎より来し人ハ其煩しさふ堪ぶやひらん例の二人ハ臥床を這出で今日
の見物を楽みふ朝の支度も手早く仕舞ひ待間程なく著者も起出で是亦朝
飯を志たゝめで食物は胃中に落付くまで先一服と煙草薫らし今日の順路
を豫め考へやをら身を起して二人を誘ひぶらりと宿所を立出でれそがぬ
旅のそれあらねど今朝ハ殊更落付けるも第一着ふ博物館を見んとを開場
の時刻を計るなるべし著「皆さんハ毎日の見物で足が疲れませう何ふし

ろ二里四方の大都會それとも山道形や鍵の手を縫て歩行くらゐ延里数ハ
して勘定もれば一日ハ里程ハ男一人前の規則の里数どけい此度ありまし
ん。「そうでもないんめへ已アハア國ハ居るやア平坦な道を歩行む事ア滅多
ふなれもでは碁盤の上サ歩行む様な大阪の市中ハ何てもねへがお栄さん
ハ女子の足サおまけハ京都育ちふんざもぐみ隨分疲労らんべ。栄「ホ……
又こゝいが出まんエイ〻エ私や珍らしいのと貴君方が便ハなるので沢山
面白うてちよつとも疲労いことハおへんエ著「夫ハ何より仕合でも今日
ハ本町橋の博物館ら始めて市中をぶらつき西南ら南の方をらけて廻
る積りでんイヤ博物場へ来ました此所ハ旧幕の時分ハ町奉行の役所で
在つたのでん今ハ大阪府の博物館と圖書室とに代りまゝたちよれと待て
お出なされ通券を買ら○六錢を投して縱覽券三枚を買受け門内ハ入り
正面の館前ハ上草履と履き換へ館内へ這入る著「こゝが美術館ど下ハ
敷詰たのハ皆寄木ハ板間天井の繪紋ハ大和法隆寺の古畫を模擬したの

そうゝ此方の端ら順ハ見なされ。栄「成程美しハ事ざイヤくりやア古道
具屋の店サ往た様だ中々貴れも此も有るべゑが已らハア明盲で解んねへ
著「古道具屋とハ酷れ事をいふ子此處ハ陳列しても此ハ膝器でも陶器で
も金銀銅の器物其外紫檀象牙などの細工物まゞ皆日本ハ二ツとなれ貴重
る品斗りだがお前さんハやア解らなけも無理でハなれ私とても目の利な
れ方だら栄「殿村ゑつとハふ人の出しと品が沢山おゞエ著「フム夫ハ
米喜とれふ有名ハ酒造家でん此家ハ中々沢山道具を持て居らるとと見
えて始終さし代引換出品ハ出ますお栄さんも此館中ハ物ハ見物しても余で
面白くない方でせうから此位ハ〻て彼所へ廻りませうサア是ら先きが
賣品店で第一室ら第九室まで有る西洋小間物呉服反物鏡器瀬戸物硝子
器塗物袋物藤細工竹細工數物段通紙函まで何一つ不足なもハなれ何れ
も正札附で直段ハ改正以来大きに廉くなりました。栄「正札附でも大阪の
事だもでハ負るべゑ著「イヤ此所ハ正真の正札で一文も懸引なしだ大阪

ハ正札附でも買ろといひなさるが名代の店へ往さら決して買かれ志らし
普通の商店なら大抵ハ幾分か値懸直をいひて愛嬌ハ買るのが習慣だから
いひ直で買へべ買ろぶる殊ハ露店などハ懸直ハ格別で五十錢位の物なら
壹円二三十錢といふが普通だから大坂の買物ハ土地の樣子を知らなれで
ハ浮かり出来なはだが大阪とハ所ハ酷ハ懸直をいふ土地だから何でも
直切ねハならぬと思つて来た人ハ大丸や三井で反物を買ても直切たり二
厘ハ饅頭を一厘ハ買ろといつも直切ばりもるから人ハ笑もまる事もある
あらまく注意もべき事でハサア是で賣品ハ店ハお志まれど是ら園内を
見せませう此園中ハ諸動物植物巨鐘大材などがありて噴水器も備付て
ある栄「ヲヤ〳〵奇麗ハ鳥が居まんエマア羽翼を一ぱハ張げて美しい
こと著「それハ孔雀ですハ羽翼を擴げて是見よがしの顔をして居る方が雄
で此方ハ小さくなつて居るのが雌でハ栄「雌と雄とハ違ひどんエ
ーナ著「もべて禽獸ハ何でも雌よりハ雄の方が立派でハ栄「人間ハどう

だべ著「人類でハ男ハ女よりも脊が高い体格が強壯で立派どやアないか
栄「そうざんべノウ女ハ白粉や紅を塗こべりて頭ハ櫛簪を飾付る身体ハ
美しい衣裳を纏ふもでハ立派ハ見えるむアの事で表面ハら拵へ付た騙し
物ちハてハ宜かんべえ栄「ヲイヤマア男もん同志が寄て自分ハ勝手ハ自
慢をしる事ハれな憎てらしいそうして女ハ紅白粉で塗かゝめた騙し物や
と宜うマア憎てらしい事おいひる工其騙し物ハ現を脱して身代ハ命ハ捨
る僻ハ著「アハ〳〵〳〵〳〵マア宜いサ男ハ男の長所が有る女ハ女の長所が何
もハ優劣ハなれもなどト斯う仲裁をして置きませうソレ是が北海道で生
捕て来た熊ハらに居るのが土佐の長尾猿ど栄「ヲヽ怖とい事大けハ熊
どんエ著「馬でハ捕て食ふといふハら大きい筈だ鉄格子を掴んで呻つて
居ろよ栄「アリヤ〳〵猿が手を出して拜んで居るハイ栄「此熊や猿ハ
皆遠ハ國ハら生捕れて来て此樣ハ處へ入られたら悲しいことどもやらう
栄「そうだんべ定めて山サ帰りたハんべ何樣了簡で居べ志ハ著「イヤ此

場へ来てからもう余程年数が経つから馴を仕舞て食物が不自由へなし何とも思つてハ居まいがひよりと是獣がも此を言たら大方斯うだらう

猿「ヲイ隣り此熊さんお前ハマア寒い國ゑ住馴れて鹿や馬まで獲て食ふといふ強力を持て居るちらお前此國ゑ居たら定て楽しみな事だらうゑ斯んな処へ連れて来られて氣候ハ違ふ食物ハ違ふお負ゑ狭隘い檻の中へ禁錮されて苦しからうノウ已らア又お前と違つてお前より前ゑ此所へ来たが已らの國ハ

熱い土地で夏ハ辛抱が仕憎いのゑ此大阪ハ氣候ハよし食物ハ山で栃や栗を取て食ふよりも摂津米ハ已らの牙よりも白いのを食せて呉るし昼間ハ一日大阪中ハ美しい娘や芸子なんどが来て優しい奇麗な手から薩摩芋を投て呉るゝら退屈をる事ハふしそーして已が自分の手を噛んで牙をむいてゝり手を合せて拝んどりをる此が人間の氣ゑ入ると見えて皆るが可愛がつて誰も四國猿だなどゝ悪口をいえるいゝら今じやア此所ゑ居る方が結句楽みだよ

熊「長尾君お前此いふ通り已も始めハ國ゑ帰りたいゝと思つたが段々馴れて来るに隨つて故郷を懐く思ハなくなつて来て九尺二間ハ裏店よも足りない本の膝を容る斗り此狭い檻の中も廣い山中で獵師や屯田兵の山狩りゑ出逢を心配ゑ比べたら却て安心だからお前も知つて居る通り何時も大きゐ新をゝいて寝て居らもれるのヨどゑ已ハ全体北海道のアイヌの中で育さのだゝらお前の様ゑお辞義どゝり拜だ

りもる藝がなければ大きに損だ志ろし此節ハ余程人馴たから人影が見えると不器用ながらも点頭く位の事ハ出来るやうに成さ孔と已ハ一体身体ハ似合ない口が尋常で目元が可愛らしいといふので前を通る別嬪お誉めて往くよ志ろし持前の癇癪ハどうも治らないから時々兵隊が来やアがつて洋刀を抜て突出したりもると腹が立て〳〵搔裂て遣ふと思ふヨアレ向ふから美しい令嬢が来たヲイ長尾君今お前の方へも往くから藝をして志つかり芋を貰ハなさいソーラ已の前へ立た薩ア芋を投て呉る子どもの檻の中へ這入る様ハ投れば宜いがアレ下へ落て仕まつさ今度ハ這入る様ハ頼みやをアレ又下へ落たヱ、志れつてへ

著「猿と熊を孔情態寫し得て妙ッ志「ハ、、、、、、栄「ヲホ、、、、、、お負けハ身振をおーておりし此事人が笑いまハヱ著「さらば博物館見物も是でお仕舞として表門へ出おせう此搞が木町搞此筋を東へ行けば城外の練兵場西へ行けバ西横堀の信濃橋を渡つて軌の南通りへ續きまハ是を西へ往き

ませうをべて本町筋ハ木綿反物等の問屋が多く此兩側ハ黒の暖簾を掛けたのハ皆相應孔財産ハる旧家でハ。◎本町筋を真直ハ御堂まで〳〵ハて來る

著「此南北の筋が御堂筋先づ北の御堂へ参詣しませう志「ヤ〳〵りやア大けへお寺だノウお堂さ為ちハい何さまッ著「是ハ西京孔本願寺の掛所で北ハ何るのが西本願寺之を津村別院とハ南ハ何る孔ら東本願寺で難波別院といひまハ志「ハ、ア東西孔兩本願寺が南北ハ分れて支店を出したのか栄「ヲホ、、、、、支店やと勿体ない事をおいひるヱ志「マアサ矢張佛法を弘める為だてハ支店といつても悪くいハんめへ著「團兵ヱさん例の名吟何ハ趣向が附ましたハ子志「どうも面白くねへが

西本願寺と書ハ分るれど

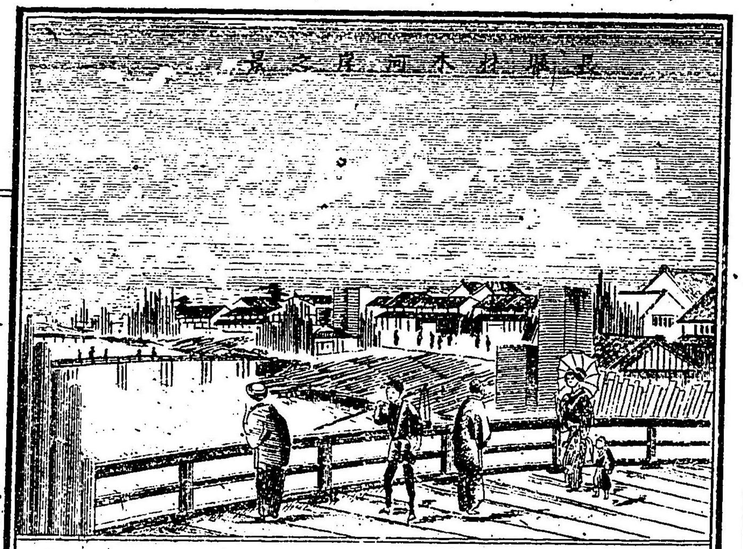
手方殺世ハ西洋坐ッ志

著「イヤ先それで役目ハ濟だが此御堂筋ハ佛像佛檀珠數本魚等を賣る佛具師が沢山ハる此外ハ下駄の鼻緒雪駄の問屋又三月孔雛道具と五月孔

軍人形い其季節み向つて店を飾るが東京ゐ十軒店み劣らなに見事なもゐ
どゞぜ⊙是より南の御堂の後へ廻つて坐广神社み参詣し又御堂筋へ出で
有名の呉服店小橋屋の前より北の方御堂の前を指さし鯛屋貞柳の古跡芭
蕉翁終焉の地などを教へ示し南み向みて博勞町へ出で難波神社み参詣を
此難波神社い仁德天皇を祀れるもゐなれとも末社み稲荷社ありて人の信
仰厚く大み繁昌せるを以て世人い只博勞町の稲荷社と呼びて本社の仁德
帝なることを知らざるが如し廡を借して母家を取らるゝとい是等をいふ
まや社内彦六坐等を見て南の門へ出で一町南の通り順慶町へ出る

順慶町　新町　四ツ橋　長堀

著「此東西の筋が順慶町通昼夜とも此通りゐ賑ひだ是を西へ行きませう
徒し今朝い出ゝけが遅かつたのと博物館を見たのとでもう十二時み成ま
したから此邊て一寸昼飯を遣つて往きませう⊙或る割烹店みて支度を為
「又立出て西み向み著「是が新町橋でゐソレ是ゝら西が名代の新町遊廓




府下遊廓中の年寄株だ是所を西へ突抜けると西口をゐつて賑ひな町がゐる夫ゝら西へ木津川で突當て松島へ渡る方角だゝら是邊ゝら引返しませう遊廓ゐ悉しい事ハ遊廓案内ゐ部で御覧なさゐ⊙新町橋ゐ西詰より南へ長堀み出る著「これが遠國すでも名の通つた四ツ橋で東西みあるゐが長堀川み架つた炭屋橋吉野屋橋南北み見えるのが西横堀川み架渡しを上繋橋下繋橋此四ツの橋が四角形み架つて奇観だゝら名所の一ツみ數へてゐる「涼しさよ四ツ橋筏四ツ流れけり」

などゝ句もつゞまり此邊ハ煙管ゞ名物で煙管屋ハ軒を並べて居る色〳〵ハ
ア成程淀屋橋の煙草入四ツ橋ゝ煙管ハ名高ゝもゝだんス著〳〵又此長堀通
と西横堀東通りとゝハ材木問屋ゞ多く川中ゝら川端ゝ納家陸側の自宅の
内外まで悉く材木で詰つゝるゝを見なされ材木問屋ゝハ大〳〵た身代の
家が沢山有りまんぜ色〳〵大阪ハ流石ゝ廣いもんだ全ゝ商賣ゝ家ゞ一ツ所ゝサ
三町も四町も塊つて居るハイ著〳〵左樣サ全商賣ゞ一ツ所に集つて居るのハ
便利な為でせう先づ其商賣ゝ集つて居る場所といへバ

◉材木商ハ　長堀北通り　西横堀の東通り
◉古着商ハ　坐摩の前・佐の屋橋筋　天満天神の裏門
◉瀬戸物ハ　西横堀西通　◉舶來品ハ　心齋橋通
◉書籍商ハ　心齋橋通り　◉木綿反物ハ　本町通り
◉藥種商ハ　道修町もゝし　◉雜菓子ハ　松屋町もゝし
◉建具古道具　堀江橋通　船場丼池筋　天滿天神裏門より西

此外枚擧ゝ遑あらゝだゞざりと右の通りでも又町の名ゝ米屋町呉服町綿
屋町畳屋町玉屋町炭屋町鍛冶屋町笠屋町瓦屋町竹屋町などのつゞるのハ昔
し夫々商人ゞ寄集つて居た為でせうゞ今ハ其名ハ在ても必ゞ竹屋町ゝ竹
屋ゞつゞるとゝハふ訳でハない色〳〵そうだんべゝウ備後町ゞなどゝ備後の人
斗居るゝけでもあんめへし唐物町だつて日本ゝ物もつゞるべゝ著〳〵詰らな
ゝ事をいふ人だ

心齋橋筋　島の内　五花街　千日前
二ツ井戸　道頓堀

著〳〵サア是ゞ心齋橋でゝハ半月形の鉄橋見事ゝもゝでせう是筋南北の商賣
でハ商賣ゝ盛んなのと新機流行の商品を賣出ものとハ他ゝ熱鬧場ゝ及ぶ
なゝ所でゝハ其筈でせう此町筋ゝ商ふ物品ハ西洋物でも日本物でも最も開
けた文明社會の人ゝ必要ゝ物斗りで農家や旧弊家を相手ゝ〳〵る以前ゝら
の商賣柄とハ自ゞ趣きゞ違ふ時計あり洋傘ありフラン子ルなり羅紗あり

革盤なり書籍あり皆當世の人物み入用ひ物斗り仕賣る店が集つて居るから自然と町通りが開化ぬれて居る此橋から北ホい舶来品商藥舗時計店書籍商洋傘屋莫大小商新聞雑誌の賣捌店錦畫石版畫の商店等が軒を列べて兩側の招牌家毎に意匠を擬して客を引く有様い勇ましい事でにきて是橋を渡つて南へ往きまをう是から南道頓堀の間を島の内とれ云めでに此處い昼むらでなく夜分ゝ電氣燈を点して賑ゝな事でを〻〻如何さま賑やかだんスハヽア此家が玩弄物店ゝ此所が寫真屋ゝ此所い菓子屋彼所が果物店著〻アヽ危ぶれ後ゝら車が來た團兵エさん氣を付なれと怪我をしますぜ〻〻イヤハヤ騒がしいこんが落付て物を見る事も出来ねヘノウ已アイ栄〻〻のんたの様ホおいひたら大阪の町ハ歩行んどんエ著〻イヤ他所ら車夫が人込みの往来サ車をホつ飛して走るれば危くつて〻〻大嫌だハら来た人ハ無理のない事が道の真中を歩ゝなれで成だけ片傍へ寄て歩行なさいソレ此所が大丸の呉服店てを〻〻ヲーヤヲヤ大げへノウ大阪の大丸ちホい此所の事だゝ成る程大けへ〻〻何ど久七太助清八ありやア何だゝ云人の名を紙サ書て張付てゐるのい著〻フさムゐりやアあれ下に坐て居る番頭の名だを〻〻ハヽア番頭ゝ名前ゝそ〻てゐのヲワー〻〻といつて居るゝ何の為だんべ著〻アレハ小供衆とゐつて丁雅を呼んで客から注文の品を出させるのが誰が聞て解らなれば彼の仲間ぢやア能く解つて居るのさを〻〻ヤアく〻そうだんべ云ゝノウそんだら他の者が大丸の言葉サ習ホやア英語ゝ稽古をまる様なもれがんべ云著〻まさら左様でもない聞馴きると自然ホ解るやうホ成るのが何でも商賣々々で其道の者あらばよく通用まる結でに医者の處方書や質屋の通帳を見なされ素人が見ちやアさりぱり讀めない此様ホ事を書たら調合方ゝ藥を間違へて人を殺しやアを〻まんゝこんホ書き様じやアゝ今度質を受出を時單衣が入用だのホ綿入を出しやアを〻まいゝと案じるゝ決して間違いない子栄〻〻ヲホここく先生い質屋の通帳を悉しう知てお居るエ〻〻先生だつて質屋サ往ねへち

ふ事もあんめへ羊羹色の薄羽織と五子ゝは袷羽織を入き易る時もあるべを著「ハ、、、、、、、これつア失策た併し羊羹色の羽織い聞えてゞ五子ゝは羽織とれふもゝい大阪ふい無れテ忠「ゥるハイ當然だら七子だのお前さんのハ古けて仕舞を七子とい往ゝ孫へもぞふ五子位だべサ栄「ヲホ、、、、、ヨウマアあんな悪口おいひるエ著「中々口が悪くなりさ此調子でもう一週間も大阪ふ置ゝら仕様がなくあるだらアハ、、、、、忠「フ、、、、、質屋から襤褸が出た著「イヤ相變らぎゝ貧乏で質々四十苦ゞ絶えなゝ栄「アレ見とむなうおをエ人中でそんな事をおいひると著「ヲヽ饒舌て居る内戎橋へ來すしたぜ此川ゞ道頓堀此橋い一昨日大黒橋から見えて居た戎橋でゝ此北詰を東へ往けバ宗右エ門町世ふ島の内といふ花街で南地五花街の其一つでんサア是橋ゝら向ふゞ色氣と食氣の世界贅沢ふ事ならお好み次第だソレ此角を引くるめたゝゞ料理と蒲鉾とうどんと漬物鯛みそ鯉でんぶの甘れもゝ尽しで身代を仕上げた有名の丸力だ是から難波新地の花街を廻

すませう○是より濵通りを西へ九郎右エ門町を通り芝居裏中筋相生町と順ふ廻り戎橋筋を南へ行き坂堺鉄道會社ゝ難波停車場眺望閣等を巡覧し引返して法善寺境内金毘羅社ふ参詣し落語席楊弓店などゝ前を通り東の門を出で〻南へ曲り千日ぜへふ出る著「ソレ是ゞ旧千日前といつて觀世物手品軽業などゞ両側ふ軒を並べて居る何と賑かでいなれり栄「ヲヽやこのましい事太鼓や鐘の囃子と人を呼ぶ聲とでみゝが潰裂るやうとゝエ忠「ヤアハアくりやア魂消ます

ふ事もあんめへ羊羹色の薄羽織と五子ゝ紙袷羽織を入き易る時もあるべゑ著ハ、、、、、これつア失策た併し羊羹色の羽織い聞えゝゞ五子ゝ紙羽織とはふも孔い大阪ふハ無れテ忠ハイ當然だら七子だお前さんのハ古けて仕舞て七子とハ往ゝ称へもでふ五子位だべサ采ヲホ、、、、、ヨウマアあんな悪口おいひるエ著中々口が悪くなりさ此調子でもう一週間も大阪ふ置ゝら仕様がなくあるだらアハ、、、、、ネフ、、、、、質屋から襤褸が出た著イヤ相變らぜ孔貧乏で質々四十苦が絶えない采アレ見とむなうおをエ人中でそんな事をおいひると著ヲヽ饒舌て居る内戎橋へ來ましたぜ此川が道頓堀此橋い一昨日大黒橋から見えて居た戎橋でハ此北詰を東へ往けバ宗右エ門町世ふ島の内といふ花街で南地五花街の其一つでんサア是橋ら向ふが色氣と食氣の世界贅沢ふ事ならお好み次第だソレ此角を引くるめたれが料理と蒲鉾とうどんと漬物鯛みそ鰹でんぶの甘れも孔尽しで身代を仕上げた有名の丸力だ是から難波新地の花街を廻

まませう○是ゝり濱通りを西へ九郎右エ門町を通り芝居裏中筋相生町と順ふ廻り戎橋筋を南へ行き坂堺鉄道會社孔難波停車場眺望閣等を巡覧し引返して法善寺境内金毘羅社ふ参詣し落語席楊弓店など孔前を通り東の門を出で〳〵南へ曲り千日まへふ出る著ソレ是が旧千日前といつて観世物手品軽業などが兩側ふ軒を並べて居る何と賑かでいなれり采ヲヽ、やこのまましい事太鼓や鐘の囃子と人を呼ぶ聲とでみゝが潰裂るやうとも忠エ忠ヤアハアくりやア魂消まう忠ゝ

そうして此人の出る事いどうざんべ已ハア壓れて〳〵せつおくりてな
んねへ著ソラ彼が生人形の見せ物だ此所がヘラ〳〵躍だ向ふが山雀の
藝手前のが猿芝居栄アレ私や人ゐ壓きて衣裳も髪もこゐゐゐなつて去
まゐまゐたエモウ何處ぞ余所へ往きとうおすエヨ〳〵ハア已もハア潘んね
へ〳〵足を踏れる頭サぶつ付るぜつねへ〳〵先生モウ宜んべ忘ら御
免ど〳〵著ハ〳〵〳〵〳〵そんならちよつと妙見さゐへ案内して傍へ往き
ませう○自安寺社妙見ゐ至り阪町れ花街へ出で東の方日本橋をドく来る
著こ社筋が日本橋筋で北の方でハ堺筋とゐふ通りでハ之を南へ行くと
今宮村の合邦が辻ら商業倶楽部へ往くれどが商業倶楽部の事ハ一昨日
悉しく話しし通りでも其手前ゐ名護町又長町せいつて日本橋筋の四五丁
目あ〳〵りの総稱だが是所ハ貧民の巣窟乞食の本陣で不潔極まる處だ此處
の貧民ハ先祖以来社乞食もつり重代の紙屑拾ひらうの仕換磨砂賣下駄の
古ゐのを買ふなどゐいふ商人や職人衆が多いでも此立派な商人衆や職

人の數ハ凡そ一萬以上もあるでせう是等ハ皆日々市中をかけぶり廻つて
僅か社錢を儲けて歸ると其日の家賃一日分を拂ふ尤も少し身代のよきら
う仕換や紙屑買などハ家主も信用して五日十日の猶豫ハ与らうが總体ゐ
一日極めでハ家賃ゐ拂つた殘の錢を近所の米屋へ持て往て先白米を三合
なり五合なり買つて歸りゐハ八百屋へ寄つて三厘社小皿盛二厘の漬物を
調へて内へ歸ると土の鍋で飯を焚き家内中がコレハ御馳走と舌を鳴して
食ひ終る夜具も寢着もなゐゐら氣樂だ二畳敷の大座敷へ其儘ごろ〳〵と
轉がつて寢るとゐふ始末でハ去ら乍しまどこれらハ一日分の食料のある上
等社貧民で下等でハ中々米ハ買へなゐゐら流石ハ場所がらどけゐ調法だ
飯を焚て賣て居ゐハ子一錢なり二錢なりの錢を持て片手ゐハ古びた食櫃
それも無ゐ方が多くつて褸手拭ゐど風持つて往くもある飯屋ハ小判形の
櫃ゐら飯をもくひ出して之を權衡ゐらけ一錢で何十何文二錢ゐら百何十
文と目方で賣る三度社食事をこれで濟せて居るもあるもう一つ下等でハ

陸軍兵営で兵隊ゐ食せと飯ゐ残るを拂下げて來をうる社を買ひまん此飯ゐハ上中下の三等があつて矢張目方で賣るゐれをバそれ〳〵のカネ應じて買つて食ふとれゐ何と人の身弦上ゐも段々ゐるものでハなれか栄「憐まな人も沢山おをエーナ私やそんゐ事を聞さら心細ゐなつて來てこなれゐ見物ゐ歩行さり志てくもイヤーゐなつて來ます」たエ志「本とだンス先生も点そげへな汚ねへけちゐ話しを仕ねへバ宜いゐ第一大阪の耻ぢやアあんめへゐ著「ハ、、、、序だゐら話したんぢナニ是も大阪社繁昌だ金持もあをバ貧乏人もゐる枯木も山の賑ひとやらでせうヨ○日本橋社南詰を東へ二ツ井戸の邊へ来る著「此通りで名高れのハ八霜丹をめの煉薬呉服店の轡屋津の清の粟おこしソレ是ゐ二ツ井戸でゐ志「二ツ井戸ちゐハ名高へもんだ此井戸ゐそうかイウ成程井戸ゐ二ツゐつ付て居る井戸の中ハどげへなゐ覗いて見やう著「ゐ」ちされ別ゐ変つて事ハないのさ志「アニハアそれでも

著「他國ゐら来た人い名を聞て珍しゐるも無理ハなれ向ゐの突当りゐ吉介といふ植木屋で其前の南北の通りゐ一昨日社通つた松屋町筋ぢら行くゐい及ぶまれ跡へ引返して道頓堀を見物しませう丁度日も暮ゐつて来た頃て電氣燈ゐ点くでせうソレ此日本橋ゐら西戎橋筋まで社間ゐ檜下これゐ此頃新築した辨天坐でエ栄「立派な芝居ぢエアレ家根の上ゐ辨天さんゐ琵琶を弾いを居る像ゐおをエ志「ハヽア大方竹生島ゐらでも出張して居るんぢべサ著「此濱側ゐ料理屋を見なされ志「井筒ちゐ名前ざンスナント大けへ家ぢ著「彼所ゐ高く建されゐ京與だ志「イヤハアゐもも立派な料理屋ぢ四階作りざンス著「ソレ是ゐ朝日坐其次ゐ角坐又其次ゐ中の芝居西の端ゐ浪花坐ざ是れで五軒の檜ゐ揃つて居ます栄「美しい看板どもエ私や芝居なら御膳を食れでも見ておをエ志「ナント〳〵

盛んどノウ著「此前通りから芝居々々の間ゐ四角な行燈をのけさゐが芝居茶屋でひアレ向ふから別嬪が来た

栄「ラ、美しい粋な婦人もんどれエ

著「アリヤア大方冨田屋遉の藝子でせう大阪の中でも南の藝者ハ派手で意氣なのが持前ざ

栄「生た辯天さまの様ざノウナント此遉ハ世界ゥ別ざ此五軒の芝居さへあるゐ甘いもゐれハ食次第美しい姉子ハ見次第だ先刻の長町の話とハ雲泥の相違だノウそうして此芝居ハ昔しゃら此通りゐ繁昌したもゐどんべゑゥ

著「左様サ昔から繁昌いして居さが近年ゐなりてゥらいハ人が段々贅沢ゐなりさゐら建築其外とも以前よりハ立派ゐなりて一層繁昌を増して来た

栄「ナールなど○道頓堀ゐ賑ひゐい眼もそれ足もそでろまを往つ戻りつ詠め入る内芝居の内外茶屋料理屋の各所ゐ装置ある電氣燈一時ゐパッと光り輝くまぞ将ゐ西海ゐ沈んとする太陽の再び引返しこるうと疑ゐれ光輝さながら白晝の如しさ

著「ハ、、、、、今電氣燈が点さのださ

栄「そりやアハア現消た

著「ハ、、、、、イヤハア之りやアとうだべナ

栄「界がふつくち返つてお日さゐが出なゐしたがと思つ

著「文明の利器ハ驚いさもゐざ子ゐ先づ今日でゐ電燈が開化最新の光りでせうそ〜て我大阪の繁昌も金城の精氣聚爛たる古昔からの光を此最新の電光を相映じていよ〜赫耀の光を顕しまゥ

栄「さて皆さん連日の見物ゐ定めて目も足も

序ゐ口も草臥まゝたらう私も草鞋の代りゐ筆が切れまゝた先づ都合よく
案内と終つて祝ひゐ此邊の割烹店で一杯白を浮べまをう 巻栄〳〵大きゐ御
苦労さま

名勝漫遊 大阪新繁昌記 終


明治廿五年十一月十五日印刷
同 年十一月十六日出版

定價七錢

著作者 東京日本橋區拾三番地寄留 岡本竹二郎
印刷兼發行者 大阪市東區備後町五丁目八番屋敷寄留 岸本榮七
發賣所 大阪市東區備後町四丁目七拾八番屋敷 吉岡平助
發賣所 大阪市東區備後町五丁目 盛文館
大賣捌所 神戸市元町通五丁目 吉岡支店



版權所有